

---

Re:BirthWorld

# カウンターフェイトを暴く者

らきるち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Re:BirthWorld      カウンターフェイトを暴く者

### 【Nコード】

N3458F

### 【作者名】

らきるち

### 【あらすじ】

それぞれが、異なる経緯で、しかし同じ空間に飲み込まれた。

紫の空が広がり、硝子のような大地が続く、「簡単に言っちゃえば異次元なの」アズラエルは気楽に構えていた。「どやつかの、心ん中じやのう」ピアドラはいつもより元氣そうだ。それぞれが、バラバラの位置で事態を眺め、見知らぬ隣人<sup>アッシュヘアー</sup>と再会する。アッシュヘアーもまた、どこか楽しそうであった。異次元の主（アズラエル曰く「妬む者」）は、何を望むのか。どうして彼らを招待したのだろうか。一人、また一人と、紫色の空の下、歩き始める。何処に招か

ね、よじとま、彼らは彼らでしかない。

## 00 (前書き)

この作品は、ネット上で公開されているファンタジー作品、『Re:Birth World』の二次創作作品の一部序章です。構  
想が固まっていない部分も多少あるため、一部表現はよく変更され  
ます。

本家サイト『白家』

URL: [http://green.ribbon.to/  
hirow/topindex.html](http://green.ribbon.to/s<br/>hirow/topindex.html)

なんて、言うんですかねえ。

荒唐無稽（たうぼうむけい）によって表された、  
とでも称しましょうか？

或いは、支離滅裂（しりめつれつ）、乱雑無章（らんざつむしょう）、無茶苦茶、アナーキー、クレイジ  
ーにルナティック……なんだって構いやしません。以上の表現で、  
だいたいアタシの言わんとする感覚はお察しいただけたかと思いま  
す。

そうです。

こんな、出鱈目（でたらめ）な風景

先刻までのアタシは知りやしないんですよ。  
いろいろと、非現実（アンバランクス）的なんですね。

アタシの知ってる晴れ空ってのは、たいていが爽快とした水色が、  
夜にしても黒が藍色と言ったところでしょう。しかし、見てごらん  
なせえ。たった今の空には薄気味の悪い紫色が広がっているじゃご  
ざいませんか。こいつはちょっと、ピクニックをするにも具合が悪  
そうです。

アタシが立っているのは、そりや当然、地面なんですけどね。こ  
れもおかしい。白濁としておりますが、硝子（キヤマン）ですぜ、こりゃ。うつ  
つを抜かして歩けば滑りそうでおっかないこつてす。

ちよっと先、つるっつるの地面から突き出し、紫の空に向って生

えるアレも、なんですかね？ 地面と似たような材質のいびつなオブジェにございます。いろいろとパターンがありましてね、中には頂上付近にたいそう大きい球体に乗せてあるものもあります。

無機質なオブジェたちの他には、なあにもないんです。

「まったく」

人を小馬鹿にしたような風景が目の前に広がっているわけですね。

アタシもなかなかビックリとしたものです。

なにせ、ここまで歩いてきたわけじゃございませんから……

いささか記憶も惑乱しておりますが、そうそう、確か旅先で立ち寄った瀟洒な街角で、お茶でも飲もうとたくらみましてね。難なく見つけた喫茶店に入ろうと、ドアを開けて

くぐると此処に立っていたという寸法です。

さっそく、背後に振り返ってみましたが、残念ながら通ってきたはずのドアはもう、何処にもありません。

参りましたねえ。

そこまで茶を求めていたわけじゃございませんが、かと言って、無聊にここで立ち往生させられるよりは、少々街に戻りたいんですが。

そう容易くはいかないようです。

夢ならば、この夢が覚めるまで。

アタシヤここに居座ることになるんでしょう。

夢の中じゃ手前の頬を掴めることは難しいですからね、何か取っ掛かりを見つける必要は、まあ、ありそう、てな具合にありんす。

幸いなことが、ひとつ。

自分が此処で「すべき事」だけはわかってるんでね。

さほど難しいことじゃないと信じたいところですね。

何故「それ」だけを理解しているのか、とか、「それ」をしてどうなるのか、なんてことは一切存じておりやしやせんが。わかってるんですよ。アタシは。アタシが何をしたら良いのか。

なので、さっさと歩き始めましょうか。

まずは一人ずつ、出会っていきましょう。

皆さん、アタシと一緒に寂しがってたらいけない。ええ、まだ顔も知らない連中ですがね。アタシは小心者なんで、他人の事が気になっしょうがないんですよ。

全員、例外なく元の世界に帰してあげるとしましょう。

それが、アタシに残された、ただ一つの行動余地なんですな。

おっと。

申し遅れましたが、アタシの名前はアッシュユヘアー。

悠悠自適アッシュユヘアーの灰被りにございます。

旅の先々で煙突掃除をしては小金を稼ぐ、卑しい風来坊にございます。汚らしい色の髪が自慢にございます。

覚えるのが手間だったんならば、結構。

どうせ最後には皆さん、いなくなっちまうんですから。

何かが、圧倒的に足りていない風景。

歩いて歩いて歩いて、青年はぼんやりと考え事をしていた。まず、二、三時間程度じゃ餓死しない身体に感謝したいな。さらに言うと普通の人間よりは多少バイタリテイに溢れた《獣人》でよかった。

でなければ、とつくに自分も残りの二人のように愚痴を連ねていたことだろう。と。

紹介から済ませておこうか。

青年の他、残りの二人は《ノーコン》と《寝るか喰うか》である。よろしくやってくれ。

《ノーコン》の方は、この異質となった世界、ガラス張りのような大地の上を意味も無く抜き足差し足で歩き、《寝るか喰うか》は寝袋に包まれて、獣人である青年の肩に担がれた手荷物の状態であった。

つまり、小言は彼の至近距離から発せられている。

「アニジャ、」

と、これは《ノーコン》の声。

「空腹ままならないヨ。流石はワタシも危機感おぼえるネ。飛んで



火に入るファイヤーフライが夏のうちに死ぬネ。今のワタシたち、それヨ」

《ノーコン》に続けて、《寝るか喰うか》が、

「しまいにはのう、レッドの尻尾までならば食つても詮無い詮無い。タンパク質じゃしい」

その二人が口々に愚痴……と言うよりはそれぞれが別の意味で常識から外れた戯言を言っているわけで、片方にレッドと呼ばれた純白獣人の青年、ウィルフレッドは、口も眉も折り曲げながら律儀な返答をしている。

「リアン、別に俺らが自分から飛び込んだわけじゃねえし、蛭が儂い虫だつてのは知ってる。だからあんなに美しいんだ。あとな、ピアドラ、ふざけんな。自分の尻尾から食つてくれ」

まあ、結局は仲が良さそうな感じだ。

三人はそれぞれ、一般基準で見れば際立った風体をしていて、味気ない空間を歩き続けていた。

ウィルフレッドは青年。しかし、先述申し上げたとおり、真っ白な体毛が見事な獣人であり、パツと見ではスレンダーな犬を彷彿とさせる。たくましい上半身を露呈した身軽な服装で、獣人でなければ露出狂だが、獣人なので様になったハンターにしっかり見える。

《ノーコン》ことリアンの外見は、説明が非常に簡単だ。くノ一の女の子である。特徴を言えば、身長がかなり低く、その身体には不釣り合いとなる大きな手裏剣を腰から下げていた。んで、気心が知れた連中の他には誰もいないと言うのに、狐を模した御面で素顔を隠して歩いていた。そこらへんは本人の気分次第である。

とりわけて異彩を放っているのは《寝るか喰うか》のピアドラだ

ろう。いや、ピアドラも、寝袋に収納されている状態なら普通の女の子にしか見えないのだが。ひとたび全身を披露すると、とにかくに異常な外見の持ち主なのである。十人が見れば十人とも、唾然とすることは確実。間違いない。ピアドラの異常性はそれほどなのだ。だからと言って、ウィルフレッドの荷物状態になっている時は、お気楽な、ババ口調の少女でしかない。

「まあ、果報は寝て待てと言うしの。果報の連絡人が耳元に居るうちには、なあんも心配は要らん。どれ、寝よう。果報があつたら起こして」

「ああ、寝ててくれ」

ピアドラの提案にウィルフレッドも賛同。

今の彼は、ツレの話し相手になるよりも、現状をよくよく熟考したい気持ちでいっぱいだったからだ。

あー、もう、なにこの状況。うぜえ。

まさか脈絡もなく異空間に飛ばされるとは。

異空間。

確実にそうだろう。疑う余地もなかった。

紫色の空、硝子細工のような大地。それだけが遠大な景色に広がり、絶える事がない、眩暈めまいを催す絶景。すぐに飽きた。退屈だ。さっさと元に戻ってほしい。

一応、ウィルフレッドも記憶の整理だけは早々に完了していた。

最後に正常だった瞬間は、思い出すまでもなく、リアンとピアドラとな、いつもの通りダベリながら街の中継地点である森の中を進行していた時のことなんだ。

魔物に襲われた。

迷惑だけでも、別に珍しいことではなかったし、寝袋から出てこないピアドラとは違い、手裏剣忍者の妹分、リアンは至近距離限定で頼もしい子であるから、二人でまったく危なげもなく魔物を撃退してやった。

倒れる魔物。気にも留めない我ら。

だがしかーし。

地面に伏すなり、魔物が大爆発。

我々、被爆。

で。

今は此処、と……

「うっ、む」

異空間に飛ばされるにしてもちよつと経緯いきまつがエキセントリック過ぎるため、ウィルフレッドは長々と判然が付かない状況にあった。あの魔物も、AとかBとか呼んで片付けなくなるほどフツの魔物であり、アーティファクトの暴走とか、澱の余波とか、そういう不穏な気配は一切しなかったのに関わらず、魔の大氾濫はんらんと言えるあの爆発。

異常なことは既に承知なのだが、いったいどのあたりからその異常が挟まってきたのか。そこが要諦ようていである。

最悪は、異常の正体がわからなくても良いのだが、せめてピアドラが本気で尻にかじり付いてくるまでにはなんとか打破したい現状だった。

なにせ、何も無い。

このような、気味の悪い、硝子の世界に留まり続けていても、おそらく待っているのは餓死か、まあ、ありえないと思うがピアドラによる共食いのどっちかエンドだろう。どっちも面白くはない。生還エンドを所望する。

「こうしてるとアレね。ワタシ、アニジャ、ドラちゃんで、この世界のアダムとイブとジェニファーよ」

さきほどまで危機感がどうのこうのと saying していたのに今はコロコロと笑いながら言うてくるリアンに、ウィルフレッドは脱力した声ながら、しかし面倒見よく返している。

「オマケ感がバリバリに溢れてるなジェニファー。俺はごめんだぞ。新世界にしても、もう少しマトモな所が良い」

「住めば都ヨ。誰もがシティボーイね」

「だからシティじゃねえつつの。これなら、原始時代の方がまだマシ」

辟易が表情全面に出ているウィルフレッド。思い出したように言う。

「そついや、時間はどれくらい経ったか」

「アニジャが最初にナンジャコリヤーって言った時から数えて二時間と十七分ネ」

やたら正確にリアンが教えてくる。さすがは忍と言うべきか、優秀な体内時計の持ち主である。

ざつと二時間。ウィルフレッドたちは歩き続けてきたわけだが、あんまり変化が起こる予兆はなし。

ただ、些細な発見は一つ。

視界の奥に、一際大きいガラスのオブジェが聳えているのだが、

それを見つけてリアンが額に手を翳しながら御面でくぐもった声を上げる。

「おおー、アレ、鳥の頭よ。よく見るネ。これで三顧目ヨ」

この謎の異空間に唯一あるのは有象無象うしやむじやうに乱立するオブジェくらいなんだが、リアンが今、指で差しているあれは、高い頂上の付近にクチバシのような突起物を生やしており、さしずめ巨大な鳥の頭部のような形をしていた。

それを、かれこれ三度も見ている。

しかも、どうやら酷似こくじではなく同一物であるらしかった。

鳥頭の生え際まで歩いてきたウィルフレッドは、一時間ほど前に自分が粗いオブジェの隙間に突きたてたペーパーナイフと再会して、かなり渋い顔をする。

「空間が捻じ曲がってんのか、ここは」

よほどの方向音痴でもなければ、真っ直ぐ歩いて過去の中継ポイントに戻ってくることもなっていないだろう。

しかし、これではつきりとした。

この空間は閉塞している。

少なくとも地理については、まるでデタラメだと考えて間違いない。地図マップを記録しても意味がない。

つまりは、馬鹿げている。

それが、些細な発見であった。

「よし、リアン。作戦会議すつぞ」

「オウ、イエー。ガッテンシヨウチは武士のナサケネ」

いろいろ思い切りの良い発言と共に片手を挙げたリアンは、やる気まんまんと言った顔つきで、その場に地面に膝を開いて座った。ウィルフレッドも「スースー」鳴らすピアドラという寝袋を地面にポイ捨てすると、白い尾を上げ、妹分と膝を交えて腰を下ろす。癖として、まずウィルフレッドは鼻の下を指でこすり、

「たぶん、このまま無目的に歩き回っても堂々巡りだな。かと言って、ジツとしてて進展があるのかもわからねー」

すると、リアンが御面をオデコにあげて、つぶらな双眸まなこが映える素顔を覗かせてきた。緊張感の少ない顔立ちが、こんなことを言う。

「なるようになるネ」

「余裕があつたら俺もそう言いたいけどよ。食料危機、というかピアドラハザードが心配でしかたねーな」

ビクッ。

と、リアンの表情が硬くなった。生唾を飲むような顔で、じつくりと視線を横手……そっちでグースカしている寝袋へ移した。にわかに信じがたいことかもしれないが。

ピアドラはなんだって喰う。

無生物でも生物でも魔法でも。なんでもだ。規模は不明とて、種別には際限が無かった。

もちろん、本人にその気が生まれたら仲間だつて難なく食べるだろう。とゆーか、マジで一度、リアンが喰われかけたことがあった。好意で菓子を与えようとしたのに、ピアドラが菓子もろともリアンをバキュームしかけた。以来、リアンはピアドラの《啜》だけはど

うしようもなく苦手になってしまったようである。  
今も、苦笑いをしながら、

「アハ、ハ。事故でもなきやダイジヨブネ、きつと。たぶん。ジュ  
ツチュウハツク……アニジャドーしようチヨウ怖くなってきたヨツ  
！」

まあ二割くらいの可能性で仲間バリバリ食われるのは超怖いだ  
ろう。

泣きそうな顔で胸元に飛び込んできたリアン。  
兄貴分はクールな顔で、しかし尾を振りながら、

「まー、安心しろよ。な？ まんがいち、ピアドラがラスボスみた  
くなくても、二人で力を合わせればきつと倒せるだろう」

ジョークである。絶対に無理だってわかってる。

その上、

「失礼じゃし」

捨てられていた寝袋の端から、青毛の、ピアドラのシッポが声と  
共に直立した。話題中であつたため、ウィルフレットにしがみつい  
ていたリアンは痙攣のように体を震わせた。

立ち上がるのは狼の尾ばかりで、それを左右に揺らしながら、寝  
袋少女はとぼけた声でクツクツとした笑い声を漏らしている。

目を細めたウィルフレットが寝袋に言葉を返す。

「なんだ、寝たんじゃないのか」

「寝たフリ」

「そうかよ」

実を言えばウィルフレッドも、狼の狸寝入りには気が付いていた。さつきからスースーとかグースカとか、わざとらしいのだ。

それと。

この空間に陥ってからのピアドラの声と表情が、普段よりもずいぶん、はつきりとしていたことが気になっていた。いつもはもっと、曖昧あいまいな顔をしているのに。

「リアーン、心配なんていらんのじゃ。ここは存外に快適だしもう。ダチを喰うほどお腹も淋しくない」

と、尻尾が弁明をしている。

寝るか喰うかであるピアドラが四六時中寝ているのは、《魔》の消費を抑える理由が大きい。なので、魔が豊富な場所では一転して元気になる。今が、わりに、その状態だと言えるのだろう。

これだけ奇天烈な空間だ、魔で満たされると言われた方が納得しやすい。

「おめーにゃ、ここがなんなのかわかんねーのか？」

「アタシにわかると思っかいな？」

「聞いてみただけだ」

非建設的だった会話の折、にわかにか青の尾の動きが速くなる。クツクツ、クツクツ。

淡い響きがしたあと、少し間を置いて、



「実を言つと、ちょこつとだけ、わかるんだのう。うん」

ウィルフレッドもリアンも、笑う寝袋をいつそう凝視した。特に、ウィルフレッドの表情は不愉快に近い。

「すげーぜ、さすがだピアドラ、なんで最初に言わねーかな」

「いつ言つても変わらんからじゃ。どうせすぐには出られん  
こは、《心の中》じゃろう」

首を傾げてリアン、「ココロ？ どゆことネ」

「深層心理、偽創世界、途方も無い魔法。そういつた類の、界限では少し有名な話があつての。いつちゃん易しい単語を扱えば……《神隠し》、かのう？」

いつもより少しだけ饒舌なピアドラの説明に、ウィルフレッドは俄然活力を取り戻した瞳で頷く。

「よし、聞いてやろうじゃねーか。好きなだけ話しな」

「いんやあ」と、ピアドラ、「おしまいじゃ」

「……」

こいつが仲間で本当に助かったと思える日がはたしてくるのだから。ウィルフレッドの尾はヘタア、と、ガラスの地面に落ちてしまふ。

クツクツクツクツ。やがてピアドラがのんびり体を起こす。人を  
おちよくつたような表情で、ゆらゆらと頭を揺らしながら、あと少

しだけクツクツとした。

「簡潔に言えば、今のでアタシの知識は終わりじゃがのう。まあ、待て。逸るな」

「あん？」

「知識はすぐに来るが、知恵は手惑う。と言つてな。ここから先はアタシの憶測に過ぎんのじゃ。それでも構わんかの？」

もったいぶる言い回しは、確実に現状を楽しんでいる声色をしていた。

ウィルフレッドは口を引き縛ったあと、「話せ」と言つように顎で促す。

ピアドラはふつと瞳に宿る光を転がしている。そして、取り付けた大きな首輪を撫でるポーズで説明を始めた。

「むかし、《まやかし》と呼ばれた魔神がおつての、今の状況は、アタシが耳にした話と似ておる」

「オーウ、まやかし、人を欺くこととネ！」

リアンの澀刺とした反応に、ピアドラは小さくうなずく。

「或いは偽物ことじゃのう。まやかしの魔神は、自身の中に《偽の世界》を内包するんじゃないと。不幸にも、その偽創世界に取り込まれた者どもは、いわゆる神隠しのように元の世界から消え去ったそう。どうじゃあ？ 面白いオカルト話じゃろう」

「他人事ならな。……お前は、ここがその魔神の心の中だつて言う

のか？」

「それはないのう。まやかしの魔神は古に死に絶えたと伝え聞く。時に、レッドとリアン。本当に 腹はへっておるのか？」

「ぬ？」

ふとした瞬間のピアドラの問いに、ウィルフレッドは恣意的に視線を下した。腹をさすってみる。

「こう言っしかなかった。」

「わからねーな」

ずっとリアンが「空腹ネ空腹ネ」と言っていたから、自分もてつきりそろそろ腹が減ってくる頃かと思っていたが、改めて尋ねられると目立つ空腹感も無い。

当のリアンも丸い目をして頭を傾けていた。

「ビミヨーに、ハングリーな気がするヨ？」

クケケケと、ピアドラが笑う。

「気がする、だけじゃろう。それは習慣的心理だのう。そろそろ腹が減ってくる頃、と思えば、減っておらずとも空腹が来たように錯覚する。二時間も歩いて、足に疲れは感じるか？ 感じるのは、精神的な疲弊だけじゃなからうか。アタシは歩いておらんから知らぬがのう」

「つまりは何が言いたいんだ」

「アタシは確信しておる。此処はどやつかの心ん中じゃ。それに取り込まれたアタシらも、物質的ではない者に変質しておる。たぶん、此処では餓死も老死もなかるうて」

ウィルフレッドは薄い紫色が広がる天空を仰いでみた。

もしもピアドラの憶測がある程度正しかったとしたら、ますます御無体な空間を自分たちはさまよっている状態らしかった。誰かの心の中って、これまた哲学的な。

「心の中でも夢の中でもなんでもいいが、俺たちはこっから出られるのかよ？　そこが、一番の問題だろ」

ひゆる。と、ピアドラが尾を顔の前まで回し、愉快に唇を歪めながら、

「知らんよ。アタシも精神世界など、初体験だもの」

尾をフリフリして言う。

ウィルフレッドは、げはあ、とした息を吐いた。

傍らでは、リアンは天空を指差すポーズで元気な声を上げている。

「ドラちゃんの手ナシがホントなら、アレネ、ワタシたち、老いもなく飢えもなく永遠のタビビトよ！　あ。なんか、カツコイーネ？」

「たぶん三日以内に飽きるぞ。ここ。なんもねーし」

「んにゃ、」とピアドラ。「そうとも限るまい」尻尾で頬を撫でながら。

発言が多い今日の寝袋魔導師を、ウィルフレッドが見つめる機会

は多かった。

彼としては、状況の判断材料がゼロに等しいため、気ままなピアドラの言葉に希望の欠片が眠っていることを期待するしかない。

でもって、ピアドラの考えとしては、こうだ。

「もしも此処が精神世界ならば、現実世界よりもずっと不安定なはずじゃ。些細なきっかけで変化が起こるかもしれない。脱出できるかはさておき、そうそう退屈することも無いじゃろ」

いや、すでに退屈なんだが。

しかし、あっさり絶望してもしかたがなし。ウィルフレッドは、ポリポリ後頭部を掻いて、最後にもう一度だけ溜息を吐いた。

荷物が、ねーんだよな。たぶん爆発した魔獣の、死骸の近くに置いてきてしまった。

荷物には退屈のお供、本がいろいろ入ってたっていうのに。ちくしょーめ。

ピアドラの言葉がまず一つ、真実となる。

変化は、わりとすぐに到来したのだ。

それは、ウィルフレッドたちが地べたに腰を下ろして一時間余、経過した時分。

「オーウツ!？」

やおら、大地が振動した。

地震。

さらに言えば大地震である。まるでこのフザケタ空間を神様のな

誰かが無造作に掴んでシェイクしたかのような、心臓に悪い天変地異であった。

人でありながらも、獣のごとく、ウィルフレッドは地面に四肢を踏ん張って声を上げる。

「どっ、どーゆう精神状態してんだ！」

青年の狼狽。対して、そっちでリアンと一緒にキヤーキヤーしているピアドラは、揺れまくっている世界の中ノホホーンと顔で、

「どうじゃー、スリルあるじゃろー？ このまま《心の主》が精神崩壊してアタシらごとジ・エンドかもわからんのを」

「笑、い、事、じゃ、ねえッ」

が。それこそ大地が割れそうだった地震は、すぐに終焉を迎えていく。

「おや、収まったの」

あれほどの激震だったというのに、大地から突き出している硝子のオブジェたちは今も元気に突き出しっぱなしだ。

リアンと仲良く抱き合っていたピアドラは、またもクツクツと笑い、

「些かな変化とて、心とは容易く揺れ動くもの。とな。なんてアタシは詩人なの」

「メツチャ揺れたヨ。心の溜め池に岩をドポーンネ！」

「それも風流じゃのう。……そろそろ何か食べたいのう」

ぼそり、と、ピアドラが脈絡もなく呟いた下の句に、今まさに身を寄せていたリアンは「ギャー！」として距離を取った。

「……き、気のせいヨ？ ドラちゃん自分で言ってたネ。ここでハングリーは起きない」

クツクツ、クツクツ。

「間食は、空腹でない時でもするぞい？」

「アニジャーッ！」

笑うピアドラの視界から逃れるようにウィルフレッドの背中へと逃れてくる妹分。彼は立てた白尾を景気よく左右へ振りながら、無尽蔵雑食型兵器を睥睨した。

「ただでさえ、安心できない状況だったのに、仲間をビビらせてどつすんだ」

「だって可愛いんだもの。リアンは。食べちゃいたい」

「うえええ、ん。あにじゃあああっ」

「おい、いい加減に」

その時。

「……なんだ……ありゃあ」

不自然に台詞を乱し、ウィルフレッドは精悍な瞳を見開いたのだ。  
った。

「ぬう？」

残りの仲間二人も、彼の視線を追って 向こうの空に顔を向けた。

薄紫の天空に、黒い影が無数に浮いている。

黒い影は、巨大な翼を広げているようだった。

理解するのは簡単だ。

魔物。

それも、すごい数。

「こつち来るのう」と、呑気な声。

「たく。地震の次はなんだってんだよ」

鼻の下をこすりながら、ぼやくウィルフレッドの前方に、さっき  
までは怯えていたリアンが勢いよく飛び出した。

指を輪のようにした、独特の遠謀法えんぼうで魔物が飛ぶ空を確認する。

「見るからにドラゴンな輩ヨ。ざつと、……五十七！」

ざつとと言うわりには正確無比な測量を遂行している。

ウィルフレッドは無音の舌打ち。50オーバーとは、面倒極まり  
ない数だ。ピアドラの言う通り、空飛ぶ影の飛行コースは明らかに  
こちらへと向いており、まあ、敵意むんむんだと判断しておいた方



が後腐れもないだろう。

戦える態勢には入っておいた方が良さそうだ。

再び、舌打ち。

思い出したのだ。彼が武器にしている薬弾の大半が、読書用ブックスと共に置いてきた荷物の中だと。

現在の手持ちはさほど多くない。50の敵を相手には少なすぎるのは確実。

そこで、

「ピアドラ、がんばれるか？　がんばれるな。がんばれ」

ものの試しに、純粋な武力として考えれば相当なものがある寝袋<sup>ピアドラ</sup>魔導師を激励すると、しかし案の定、唇を尖らせてくる。

「うええ。めんどつちいのう」

よほどのことがないと、こいつは率先して動きたがらない。気が乗らなければ、たとえ絶体絶命と至近距離になっても、寝袋に絡まったままだろう。下手したら寝ていて起きない時もある。

ピアドラが動くまで崇拜するのも時間も足らないし、今回も数に入れないで考えた方が懸命そうだ。

「アニジャ！」

「おっ！」

鉄製のグローブに仕込む鉤爪を立てた瞬間、ウィルフレッドは若干距離後方に跳んでいた。

既に、飛翔部隊の先頭集団が近距離に迫っていたのだ。

最大級の熊よりもさらに一回りほど膨らんだ身体。リアンの報告

通り、それは、いかにもドラゴンらしい顔付きをしている。

長い首。細い頭。整った牙

あまりにも、ドラゴンの普遍的イメージ通りすぎる、……違和感。考えている暇はない。大きい、爬虫類の顔が放つ甲高い声が響き渡った。

ブオアッ！

高速で滑空してきたかと思うと、うち一匹が、硝子の大地に叩きつける轟音を上げて、前方空間に着地する。長い首を回して、高い声。翼を躍らせている。

位置としてドラゴンと最も近かったのはリアン。

まさに忍者。敏捷を極めたような動作で、腰にある巨大手裏剣に手をかけるや否や、

「月並みフェイスのドラゴンめ！ かかってくるなら承知しないヨ！」

素直にかかってくるドラゴン。

「ナイス度胸！ サナガラ電光石火、受けよテンチューー！」

何よりも速いリアンの、最大武器である大手裏剣が投擲された。

その勢いたるや、まさに空を裂くもの。

風を断つて超高速で放たれた。

その、誰にも止められないハイエンドな一撃は迫り来るドラゴン……とは、まるで逆方向へ旋回すると、突っ立っていたウィルフレットの髪の毛を二三本かすめていき遙か後方に聳えた硝子のオブリエの頂上に突き刺さって停止した。

「……………」

けたはずれの大暴投を見せた投擲手が言うことはと言えば、

「敵もサル者、からくも外したネ！」

もう、おわかりだろう。

リアンはどうしようもない《ノーコン》なのである。

手裏剣を投げて目標に到着したためしがない。

今回もその悪癖あくへきのせいで、いきなり得物を放棄してしまった。ウィルフレッドも戦況を見据える作業に没頭していたため、「投げんじゃねーぞ」という必須の一言をつい忘れてしまった。うん。妹分は何も悪くない。これは兄貴分の失態である。

「ファイトじゃー。ここからは敵も苦しいぞお」

と、いつの間にかレッドよりもずっと後方に座って、くつろいでいるピアドラの、むしろ止めてもらいたい声援は無視しておく。まだ始まったばかりやっちゅーねん。

他のステロ型ドラゴンも続々と着陸に成功している中、身から出た錆とは言え、完全に手ぶらとなってしまう苦しいリアン。最初の一匹であるドラゴンが「ぎゅおー」と余裕でも感じそうな声で、凶暴な頭をリアンに向けて伸ばしてきた。だけでも。

「ノーサンキュー！」

ボギツ。と、小さい少女がドラゴンを素手で殴っていた。けっこうシユール。

だいたい音を聞けばわかると思うが、彼女の一撃で初陣のドラゴンの首はあらぬ方向に屈折してしまい、巨体をきりもみ回転させて奥先の景色に吹っ飛んでいった。それきり、動かなくなる。

「ふ。脳あるツメはタ力をくくるものネ」

オトボケ忍者であるリアンが最も得意にしている戦法は、大手裏剣を使い「殴打する」ことであるが、実は素手でも相当な威力を實現する。

その属性は《力》。怪力に関しては比類がない。

リアンがここまで戦闘に特化している以上、普段からウィルフレッドはサポート役に徹することが多い。

今も、既に二体目のドラゴンと臨戦していたリアンの、嫌な方向から迫っていた三体目に、自慢のグローブを差し向けて。

力チリ。

音が鳴った直後に、グローブへ装填されていた薬弾が放たれ、ドラゴンの首筋に命中。パスン、という抜けた音だけが響き、爬虫類の首があっさりと灼け落ちていた。

一体を葬ると、彼は瞳をすうっと細める。

内部効果の薬弾、試し撃ちのつもりであったんだが。

リアンの打撃もよく効くし、弾丸も容易く貫通する。敏捷性も、遅くはないが余裕をもって見切れる範囲。何より、動きに知性を感じない。

早々に結論が出た。

こいつら、まるで大したことがない。

上空でこちらを狙うように旋回している大半を見上げながら、ウィルフレッドをおおよその作戦を妹分に伝令する。

「リアン！ とりあえず前方から順に相手してくれ。あの方角は任せろ」

「アイアイサー！」

結局。

数はすごかったものの、二人が危険を感じるほどの苦戦をするとはなかった。

「大漁じゃのう。ご苦労さん」

そして結局は加勢をしてくれなかったピアドラが、ローブの袖で両手を隠す格好でクツクツと歩いてくる。

今や、硝子の大地は動かなくなった巨獣で埋め尽くされていた。ウィルフレッドはぐるりと一望したあと、ピアドラに顔を落ち着けて、

「精神世界だつてのに、こんな奴らがいるもんか？ 手応えも何もかも、生きてるって感じだぞ」

要するに、お前の憶測はどうなんだという話である。疑念を投げつけられたピアドラは、ケタケタと笑っていた。

「アタシに聞かれても困るわいな。まあ、居る居ないで答えれば、居るじゃろ」

一匹のくたばったドラゴンの頭部を足でつんつん突いて、言葉を続ける。

「手応え、と言ったがの、精神が物質の模倣をするのは、そう難しいものでないぞ。感覚がどこから来るかという話だのう。時に、夢の中にも感覚は存在するじゃろっ」

「なんでもありって言いたいのか」

「ま、アタシの憶測を確証する術すべなどありゃんせ」

歯牙にもかからない結論で打ち切って、こどもの顔で朗らかに笑んでいる。

ウィルフレッドは自然と鼻を鳴らし、改めて周囲の光景を遊覧することにした。

あれだ、さつき気になったことについてだ。横たわっているドラゴンども、どうにも奇妙なのである。

「なんだかのう。お上品な顔したドラゴンじゃ」

そう、そんな感じ。

襲ってきたドラゴンたちの姿かたちを見て、ウィルフレッドも、そろそろピアドラの憶測が正しいのかもしれないという予感を抱いていた。

魔物的ではない……とでも言おうか。

魔物についての定義付けをするとすれば、それは魔の暴走、《でん 澱

》と呼ばれる瘴気により変質してしまった凶悪生命である。

ここで重要なのは、そういった澱せきによる魔物という者はデフォルト的に醜悪くせうしつじな外見をしていること。邪気の塊くわいのような面構つらえをした連中だ。

ところが、どうだろう。

今、ウィルフレッドたちの周囲で巨軀を崩している飛竜たちは、まるで絵本の中から出てきたような……リアルじゃない現実性が薄いドラゴンたちであったのだ。

そもそも、魔物でない野生生物にしても清潔せいけつすぎる。唾液だえきとか、目ヤニとか、な。獣というのはもっと汚らしいものなのである。し

かし、襲つてきたドラゴンたちは綺麗すぎた。これならば精巧に作られた機械竜メカニカルと言われた方がまだ納得し易かったのに、打ち倒した多くは流血をしていたため、どうにも生き物ではあつたらしい。

「アタシの精神世界論を採用すれば、さしずめコイツらは《主》のイメージじゃろうよ」

「かもな」

「どれ。人の心ん中の味は、どんなものだろう」

ロクでもないこと言い出したピアドラが邪よこしまな笑みを張りつけて、ドラゴンの死骸の一つに体を向けた。

喰うのか。

顔を少しだけ齧しかめたウィルフレッドであつたが、気分的に好きではない行為であるというだけで、特に文句を言うつもりもない。怖いもの見たさというか、傍観はしてしまうだろう。ただしかし、リアンが声を上げていた。

「ドラちゃんツ！ー！」

文句ではない。

警告。

ピアドラの横手に倒れていた別の竜が首を持ち上げたのである。おそらく、リアンに素手で殴られたドラゴン。絶命には到らなかつたらしい。

生きていた。牙を明あけた。

「おや？」

そのドラゴンが少女よりも遙かに大きい体軀たいくを起こす頃になって、笑顔を潜ひそめないピアドラが愉快そうに瞳を丸くしながら、その方向を顧みていた。

活動を再開した竜に、ウィルフレッドが鉤爪かぎつめを顕あらわすよりも早く、尾を垂らす魔導師は言う。

「なんじゃあ、……………おぬし」

ニヤア、と、笑う。

ドラゴンの動きは這這ほつほつの体ていに近い。それでも細動する身体を起こす。消え入りそうな唸り声を唸内うなりで鳴らし、最も近いところに立つピアドラへ爬虫類の瞳を向けた。

命が尽きるまで消え去らない攻撃本能。このあたりは魔物と変わらない。

今の竜の状態は、実力不足のハンターにとっても脅威になりえない弱々しさだった。

それを少女は、享楽たを湛たえた双眸で鑑賞している。

「かわいい奴じゃのう」

そして、ゆつくりとピアドラが……………その口を、裂いた。

「踊り喰おどいが所望かえ？」

ビジュツッ!!

嫌な音がして、竜は失われた。



……数分後。

竜の姿は何処からもなくなり、広いところを佇んでいた子どもの魔導師が自分のお腹なかを撫でるようにして咳せきいている。

「なあんも味がしやせんかった。歯は応こたえのない奴らじゃ」

「ああ、うっ……」

気付いたらウィルフレッドの背後にリアンが身を寄せて、彼のシヨートパンツの端をギュツと握り締めていた。

「やっぱりドラちゃんのアレだけは、苦手ヨ……」

「俺も好きじゃねえな」

ウィルフレッドは怯える妹分の頭を撫でながら、意味も無い食事を終えた。ピアドラへ洗面を向ける。

あつと言う間に、地面を埋め尽くしていた竜の亡骸は綺麗さっぱり消失していたのだ。

ピアドラの仕業。

食事、と言うよりも掃除と表した方がしっくりと来る。それだけ、あの少女の食事風景には色気がなく、ひたすら豪快であった。

食後である寝袋娘が、すぐにこちらを顧かえりみる。

「まあ、よし。間食で満足するのも阿呆な話だしの」

それでも満足そうな笑顔を浮かべていた。

その顔だけ見れば可愛いらしいと思えなくないんだが……ウィルフレッドはますます瞳を細める。

ピアドラは頭から寝袋を被っている他は、ほぼ裸と言って良い風

体。

肋骨あほほねの浮く痩せこけた身体。

腹部に、大きな空洞。ぼっかりと開いていた。虚ろむじろに開けた穴に、乱雑な牙も生えている。

それがピアドラの、もう一つの唾くちだった。

あまりにも異質な、常人が見れば蒼白になりそうなピアドラの風貌も、しかしウィルフレッドは既に慣れっこだったので、楽々と言葉返す。

「できりゃ、そいつらが元気だった時に食ってくれって」

「皿上で動くウインナーも面倒じゃろ」

子どもの顔で詭弁きへんめいたことを言い、クツクツと口（上の方）を押さえて笑っている。

ここに来てからのピアドラはやはり、どことなく元気そうであった。

「いいのかよ」

「んー？」

愉快そうにしているピアドラに、あえて水を差すようなことを言った。

「ずっとここに居ちゃ、ご主人にも会えないだろ」

案の定、微かすかにピアドラの笑顔が色を変える。眉間せまが少し狭せままって、不機嫌はぢぢそうな笑顔へと簡単に変貌した。

蜂吹はちぶいた声で返してくる。

「今に立ってそれを言うんかい？ 性格の悪い男だのう」

「余裕がありそうだったからな」

ウィルフレッドは、一刻も早くこの、どうにもならない閉塞的<sup>へいそく</sup>状況から抜け出したいと願っていた。だからと言って、ピアドラにも不安や不満を抱いてほしいと思ったわけでもないが。しかし、一応でもパーティを組んでいるのだから足並みを揃えて異常事態に向き合ってもらいたいものだ。

徐々に、子どもの顔からは笑顔が消えて、唇を尖らすと横を向いてしまった。

乱暴に尾を振りながら、鼻を鳴らす。

「そして性急<sup>せいかち</sup>な男じゃ。まだ半日も経つとりやせん。泡を喰うにはまだ早かるう」

慌てるようなことになる前に、なんとかかしたいと思っているんだが。

しかし目下<sup>もっか</sup>、世界から脱出する方法が見当たらない以上、確かに、未だ我武者羅<sup>がむしやらい</sup>になるべき状況とは言えない。イライラはするけどね。我慢しておく。

半日も経たず、ドラゴンの群れが現れたのだ。

そのうち、脱出のヒントがお空を飛んでくるかもしれないからな。

空からではなく、地面を走ってきてても問題はない。



ける。

「んで、逃げてる人は逃げ切れそうか？」

「んー、意外とスライム速いヨ。ぴょんぴょんジャンプして追うのヨ。かわいいヨ」

「かわいいのはわかったから」

「あ、駄目ネ。あのヒト、追いつかれたネ。上からプレスされてるヨ。スライムは大きくてクレイジー。ここから見てる分には気持ち良さそうヨ」

ヒョエエエエエエ、と、再度。この世界にはよく響く。断末魔つてほどでもないが、苦勞を感じさせる声だった。ウィルフレッドは溜息をつく。

「助けに行った方が良さそうだな……」

「でも、プニプニで気持ち良さそうヨ？」

「キモチイイ人間はヒョエーって言わねーだろ。たぶん。個人によるけど」

何よりも、人間という存在は今の状況でかなり貴重だ。この異次元空間についての手がかりを持っているかもしれない。

本当にスライムの感触を楽しんでいたとしたら誠に申し訳ないのだが、無理にでも救出させてもらうことにしよう。

「砂糖があれば良いじゃがのう。スライムに振りかければ、まあ、

ゼリーのよつこ」

馬鹿げたことを呟いているピアドラを置き去りにして、ウィルフレッドは立ち上がるとリアンが顔を向けていた方角へと走り出した。硝子のような地面だが、靴底がしっかりしているので難しくもない。

オブジェが点在する景色が流れる。ウィルフレッドの、獣人の身体を遺憾なく発揮したストライドはなかなかの速度だと言える。

しかし、もつとずつとな華奢まじやな人間の少女であるリアンの方が、速い速い。

両手を垂らした独特な走法ですぐさまウィルフレッドの前方に出ると、顔だけを振り返らせてきた。

「スライム、倒すか？ プリティだから気が進まないネ」

妹分の意見を仰ぐ声に返事をするより前、走る先の景色によつやく現場が見えてくる。

遠くで、丸い物体が三つほど飛んだり跳ねたりはしていた。最中さなかに、男の悲鳴も。

「かかか、堪忍してくださいえ！」

なんとというか、まあ。

男性がスライムから蹂躪イジメを受けている光景と出くわしたのである。それはもう上に乗られてピョンピョン跳ねられるわ、さらに上でコロコロ転がられるわ、地面に倒れ伏した男性はピクピクした腕を虚空へ伸ばし、必死に助けを求めているのだ。いとも哀れな有様である。

スライムの外見を眺めると、リアンが可愛いと言うのも納得できた。

子どもが描いたラクガキのように大きな目を張り付けたプロポの球体である。確かにアレに座れば気持ち良さそう、って風な素材感が漂ってくる。

ただ近ければ近づくほど、被害者の男性から「ぐえ」「ひい」と断続的な悲鳴が聞こえてくるため、その攻撃には多少のダメージが宿されているのかもしれない。

さて。

一、リアンが前方を走る。

二、リアンは力がある。

三、スライムはよく飛びそうだ。

よし。

「リアン、別に殺さなくてもいい。思いっきりシュートしろ」

「、ガッテンショウチ！」

兄者の提案にリアンは、ピューンと一気に速度を上げ、男性を踏み躪っているスライムたちとの距離を一瞬で詰めた。

そして大音声。

「オウツ　　レエエエイツー！」

第一蹴は、男の上で盛大に跳ねていたスライムを捕える。

さすがは軟体動物。リアンの脚が突き刺さるとグニョつと変形し、一瞬はスローモーションにも見えた視覚効果の直後には吹き飛んでいた。よく飛んだ。キラーン。それこそ星になる勢いで、紫色の空の彼方へとスライムは消え去った。

「ぐび？」

近場でバウンドしていたもう一匹のスライムは、グリッと大きな目玉の前で仲間が蹴り飛ばされたため、驚愕したように体を収縮。また膨張すると今まではグリーンだった軟体が真っ赤に変色している。怒ったらしい。

「ぐびー！」

バインと跳ねてリアンを押し潰そうと襲い掛かるが、

「ファンタジスタツ！！」

オーバヘッドでカウンターを決めていた。

プヨプヨしたモンスターの体に芯が存在するのか不明であるものの、すばらしくミートしたらしくそのスライムも同様の末路を辿ることになる。

魔法じゃなく、二匹を物理的に消し去った怪力娘は、残る一匹に顔を向ける。

最後のボール状モンスターはビクンと流動。

「ぐつぴいつ！？」

戦々恐々を柔らかい体で表現するとクルリと反転し弾みながら逃亡した。

精神世界のイメージ生命という説が濃厚な中、しかしスライムにも知性があったのか。懸命な判断である。比喻ではなくスライム勢を一蹴したリアンは、逃げゆくスライムの背中を見送って、なにやら名残惜しそうな声を出している。



「すごく……蹴り応えがあつたネ……」

どうにも爽快だったらしい。可愛いから戦うのが気乗りしないと  
言つてたのに。

「あ、あ、」

すっかりリアンのシユートに見入つていたウイルフレッドである  
が、地面から上がる上ずつた声を聞き取つて視線を下す。

スライムたちにモミクチャとされていた男が、恐怖なのかダメー  
ジなのか、体をピクピクとさせて正面に立つ獣人のことを見上げて  
いたのである。男の見開いた視線とウイルフレッドの視線がぶつか  
る。

「おたく、だいじょうぶか？」とウイルフレッド。

ボサボサと、草臥れた白髪くたびの男であつた。しかし、その顔は若い。  
獣人であればウイルフレッドとさほど歳の頃が変わらないだろう。  
さきほどの恐怖で毛髪の色素が抜けてしまったのだろうか。白髪を  
除けば際立って印象に残らない容姿をした青年だつた。

そんな彼にウイルフレッドが加減を尋ねると、男からは誰何が返  
つてくる。

「ど、どちらさんで？」

「説明のしようがねーな。ただの旅人だ。立てるか？ 立てよ」

「ああ……これはどうも、助かります」

腕を差し伸べると、白髪の青年は素直に手を受け取り引き起こさ

れた。ヨロヨロと立ち上がっていたが、特に怪我をした様子もなく、さっそく会話を始めている。

「まったく。生きた心地じゃございませんでした」

「災難だったな」

「そちらのお嬢さんで？ 先のせんのけったいな連中を追っばらっしてくれたのは」

白髪男に目を向けられ、もともと人見知りなんてしない忍者娘は澁刺と手を上げた。ニカッと笑い、

「オヤスイゴヨーよ、リアンもエンジヨイしたネ！」

したたかさなど少しも含まない幼い笑顔に、彼は控えめは瞳を丸くする。

「へえこりやまた、こんな可愛らしいお嬢さんが」

「そいつ、リアンな。俺は、レッドでいいや」

さっさと本題に入りたいウィルフレッドとしては、さっさと自己紹介を済ませておく。

愛想があるわけでもない獣人の挨拶に、灰を擦りこんだような頭髪をした青年は、ようやく初めて笑顔を見せる。まるでそれが地顔だったのか、カチリと音を上げるようにピツタリとハマったヘラヘラ顔だった。

「いやあ、へへ。こんな小汚ねえ男を助けてもらって、有難うござ

います。おまけに名前まで聞かせてくださって。しかし、困りましたねえ」

ふむっ、と息をつき、

「アタシにやお二人のように立派な名前がございません。生来名無しの煙突掃除でありんす。そいつは不便でしょうから、そうですね、アッシュヘアーと呼んでもらって一向に構いません」

「アッシュヘアー  
灰被り？」

「自前の髪が、どうにも見つともなくてね。へへ」

と、ヘラヘラしながら前髪を摘つまんでいる。卑屈な男だと言つのが、ウィルフレッドがまず持った印象であった。

同時に言えば名前も無い煙突掃除の男など、信用におけない話でもあったが、それは一介のハンターであるウィルフレッドやリアンにも同じ事が言えるため、まあ、御相子おあいこか。さらに言えば度し難く怪しい暴食寝袋がパーティに入ってるしな。

信用も嫌疑も今はまだ必要ない。

そして白髪男の名前は大して重要なことでもなかった。聞きたいことは別にある。

「じゃあ、アッシュヘアー。会ったばかりでなんだが、アンタはなんでこんな場所をうろついている？」

ウィルフレッドはとにかく、情報が欲しかった。アテにならない物でも問題ない。状況把握がゼロに等しい現在、一つでも多く何かを見知って視野を広げておかないと、具合が悪くてしかたがないのだ。

質問を受けて、アッシュヘアという青年は自分の白髪をワシワシと搔いて笑顔をクシャッと折る。

「そいつはアタシにも不心得でして。歩いてきたわけじゃございせん。夢じゃねえのかと疑<sup>うたぐ</sup>ってたところですよ」

夢。あながち、間違いではない。もっとも、ピアドラの憶測が真実だったとしたらの話だが。

「街の茶屋に入ったはずなんですけどねえ。戸をくぐったらこの有様でして」

「アンタがいたのは、なんて街だ？」

「さあ」と、困ったように言う。「なんせ、見てくれの通り、だらしのねえ流れ者<sup>もん</sup>なんで。何処の街に着いたか覚える暇もなく此処に立ってやした」

街の名前も記憶してないなんて、話にならないな。

やや不信に傾き始めているウィルフレッドの向いで、しかし、灰被りの表情がパツと輝く。

「だいぶ前に通った街の名前でもよござんしょ？ そいつなら覚えてます」

ウィルフレッドは頷く。

アッシュヘアは嬉しそうに口を開いて、

「アスカラムって街でさあ」

知っている。ウィルフレッドたちが居た場所と、そう遠方でもない。歩くとなると流石に遠いが、少なくとも同じ地方ではあった。

「悪い日に行っちゃまったのか、門前払いくらいましてね。そろそろ野垂れ死ぬ<sup>のた</sup>かって時に、よーやく門番に拾ってもらえましたが」

マジでだらしない話だな。ウィルフレッドは呆れる。

兄貴分の横にいつの間にかちよこんと立ち、アッシュヘアーの聞いていたリアンが納得したように頷いている。

「アノアタリは治安悪いヨ。最近盗賊が出たから、ギスギスして普通ヨ」

盗賊集団、タイラント。ハンターやっていてその名前を知らないと爆笑されるか異様に優しくされるか熱を測られるか、とにかくマトモな反応が返ってこないほどに有名だ。街を挙げて警戒していた可能性もある。まあ、名無しの煙突掃除だったら門兵に突っぱねられても不思議ではない。

しかし、アッシュヘアーは固定され始めた薄ら笑いの顔で、

「いやあ、まんざら悪い場所でもなかったですよ」と、懐かしむように顎を複数回落とし、「三日で出てけと言われましたが。その間に、良い思い出をこしらえる事ができました。とても気の優しい少年がいましたね。こんなアタシにも良くしてくれたんですよ」

このまま黙っているとオモイデバナシが長く続きそうで不安になったウィルフレッドは、悪いと思いつつも質問を変える。

「ここに来て、どれくらいが経った？」

アツシュヘアーは考え込んでしまう。  
案の定、はつきりとした答えではない。

「さあ。たぶん一晩も過ごしてねえと思いますが。昼も夜もありやしませんからね。どうにも」

情報源として、アツシュヘアーはあまり役立ちそうにない。  
きつとウィルフレッドたちとほとんど同じ状態なんだろう。わけもわからないまま、硝子の上に立たされた者同士。

ここは助け合って、と言いたいのが、どうにもこの男は情報以外の面でも頼り気がない。ピアドラとは違う意味でお荷物になりそうな匂いがした。

かと言って、いや、だからこそ、放っておくわけにもいかず、

「まあ、わかった。さっきのスライムみたく、変な連中もウロついてるみたいだからな。一人で居るよか纏まってた方が安全だろう」

「へ？」とアツシュヘアー。「アタシもレッドさんがたとお供してよろしいんで？」

「問題あるなら無理強いしねーけど？」

「いえ、いえいええ！ 滅相もございませんっ。はあ、へえ。アタシのようにみすばらしい男に、なんと優しいことでしょう」

ジーン、と、神に祈るように手を合わせて目を閉じている。感激してるらしい。

どうにも面倒臭い青年であったが、こういつ時にリアンのノリが非常に助かる。

「旅はミチツレ余は情けネーヨ！ アンド、実はもう一人、ドラちゃんって子も居るネ。賑やかなの、トテモ良いことヨ」

「へえへえ、ドラさんですか」

早速、アツシュヘアーは額に手を当てて、周囲をグルリと見回すように呟いてる。

「物騒な所ですあ。お一人で残すには具合が悪いんじゃないですか？ ドラさんは、何処でしょう」

まだ見てない相手を心配するあたりは、善人そうにも思えるが。どうだかね。先述の通り、アツシュヘアーの人となりを理解するにはまだ時期が早すぎる。ウィルフレッドは、小指を耳に入れる格好で平然と答えた。

「ピアドラなら心配いらねーよ。ついでに言うと、もうそこにいるぞ」

「へい？」

「なんじゃ、こやつ？」

ピアドラが口を開いた瞬間にアツシュヘアーは「ひい、ひゃあ！」と驚愕。

ずっと遠くを眺める格好だった彼の下、腰元あたりに偲んでいた小さな魔導師は彼を見上げるように立っていたのである。灯台下暗し。たまにリアンと隠密ゴッコをしてた賜物かは知らないが。

不意を突かれた煙突掃除は、瞠目の顔でピアドラを見下ろすと薄ら笑いも消えた頬をヒクヒクさせている。

「あなたが、ドラさんで？」

「ふうん」

本人照会にピアドラは答えることをせず、鼻を鳴らしながらジロジロ。ジロジロ。さらにジロジロ、値踏みするようにアッシュヘアのことを低いところから眺め回している。

観察を終えたのか、やがて、ウィルフレッドの方へニヤニヤとした顔を振り返らせて、

「どうにも、冴えん男じゃのう。レッドも、こんなガラクタなんぞ拾って何か得があるんかいな？」

かなりひどい事を言っている。

しかし、先ほどから自分でも卑屈な事を言っていたアッシュヘアが気分を悪くした様子はなく、最初の驚愕が落ち着くと後は元の軽薄は笑顔に戻って「どうも、お恥ずかしい」と笑っているだけであつた。

「放っておくわけにもいかねーだろ」

「まあ、良いか。口が寂しくなった時の非常食にはなるじやろ」

冗談なのか本気なのか即座に判断できないこと呟いて、以降はアッシュヘアに興味を無くしたように欠伸をかいている。アッシュヘアと同行することに、一応は了承したようだ。

改めて、ウィルフレッドは、

「で？ 何かアンタ、他に気がかりになつてることとか無いか？」



朗報も悪報も、なんでも歓迎するぞ」

別に、何かを期待して聞いたわけではない。最後に最も大雑把な質問をして、ウィルフレッドは気持ちを一から再出発させるつもりだった。ドラゴン、スライム、名無しの煙突掃除。もう少し様子を見てれば重要な鍵がデデンと登場する希望も持てる。

ピアドラの言う通り、まだ絶望するには早い。

そういうことで、すっかり心身ともにリラックスしてしまっていたウィルフレッドであったが。

しかし。

最後の質問で、アッシュヘアが奇妙な返答をした。

「ああ、それなら一つ」

雰囲気がわずかにも変わらないヘラヘラ顔で、

「全員と会えば、よろしいんじゃないでしょうか？」

聞いた瞬間には判然の付かない彼の物言いに、ウィルフレッドは眉を寄せたし、ピアドラですら背を向けていた状態から態勢を戻している。

ただリアンだけが素朴な顔をして、首をかしげた。反応も早かった。

「全員？ 他にも誰か居るのか？」

アッシュヘアは猫背で首肯する。

「ええ、ええ。そういうことです。アタシらだけじゃございません」

不可解なことを平素に答えている。  
次にウィルフレッドが尋ねを返した。

「そいつらは、何処にいる？」

しかし、

「さあ」と彼は恐縮そうに首を落として「誰かもわかりません」

確実だ。

この男が言ったことは確実に意味がわからない。

怪しい台詞を吐く人間はたいていが怪しい。ここに来て、ウィルフレッドの瞳にも警戒の色がじんわりと灯りだす。

「他にもいるって、どうしてアンタにそんなことがわかる？」

「それはアタシにも奇怪でしょうがねえのですが。どうしてか、そんな気がしてなりません。きっと、此処の何処かにいらっしやる皆さんと会つのが、最善なんじゃねえかと、愚かにも思っちまうんです」

妄信。

虚偽。

#### 第六感覚。

アッシュヘアーの台詞がいずれに当てはまるのかウィルフレッドには判断することができない。

ただ、クツクツと、子どもの笑い声が耳に届いた。

「なかなか面白い事を言いよるのう。あながち、ガラクタとも言い切れん」

まあ、保留……か。

アッシュヘアーに化けの皮があったとしても、ウィルフレッドが警戒を怠らねば良いだけの話だ。むしろ、化けの皮があるのなら近くに置いておいた方が尻尾を掴みやすい。

もしも、この男の言うことが事実ならば、そのうち、また誰かと会うことになるのだろう。

様子見、様子見。

それが今、最も現状に適した態勢であると、ウィルフレッドは内心で決着した。

「あ、そーよ。アッシュヘアーに、怪我ないか？」

「ええ、おかげさまで。丈夫に済んでます。にしても、リアンさんはえらい馬鹿力がありますねえ。あれにはアタシも魂消るたまげってもんですよ」

「えへへ、ソウカー？ あんなのブレイクファスト寸前よ」

「ブレク、……は？」

「朝飯前だ」

独特なリアンの言い回しに通訳を挟んだウィルフレッドは、以降は打ち解けるように会話を始めた二人を尻目にして、一度、紫色の下に広がる硝子の大地をよくよく見回した。

さすがに、気になっている。

誰か、とは、誰だ？

アッシュヘアーのように、見ず知らずの連中が他にも彷徨っていると云うのだろうか。そもそも、真つ当な者は自分たち三人だけで、

後は、全てがまやかしのかもしれない。実は解決策すら存在しない可能性すらある。

焦るにはまだ早い事は知っているが、焦燥感は少しずつだが意識下に染み出している。

「たく」

色褪せることのない淡い紫に、そろそろウィルフレッドは夜を恋しく思い始めていた。

## 02・GIRLS OVERLOOK!

目立つのは、硝子のオブジェ。

愚かな人間であれば時間の感覚すら容易く紊乱しウロウロオドオド滑稽な様を晒すしか仕方もなくなくなるほど、無変化の風景。

風景の中、最も高く聳え建ったオブジェの上に、超絶的な蟲惑性を遺憾なく發揮する萌え萌えの美少女が仁王立ちして、遠大空虚に広がる硝子張りの下界を見下ろしている壯観なシーン。

刮目せよ。

特に、未発達な少女の肢体に情欲を催すような、魔王的基準により万死に値する倒錯性愛主義者は目を離すべきではない。

身悶えよ。

蝙蝠のような、黒色の翼。

そして先端が良い感じの三角になっている尻尾。

誰にも文句を言わせない悪魔っ子的美少女。

最後に、耳を澄ませよ。

アズラエル閣下の詔である。

もとい、ひとりごと。

「名探偵を演じるなら助手が欲しいところなの。愚鈍で無能で特技は疑問符の連発。白猿……は、馬鹿過ぎるか」

ぶつぶつ言っている。

退屈であると独り言の頻度が上昇する人種は少なくない。アズラエルもその手合いだった。先ほどから、誰よりも高い場所で定期的に思惑を独白し、その悩ましげな表情はロリコン帝国を傾国、通り越して軽く滅亡させちゃいそうな程の美貌を作っていた。基本的にモノローグは彼女を全面的にヨイシヨする姿勢である。

いや、たとえ誰が客観性を極めようとしても、硝子の塔で世界を俯瞰する少女に、魔性と近い魅力を見て取ったことだろう。とか、言ってみるのだ。

まあ人の好みは多種多様なのであまり絶対的なことは言えないが、全世界的基準で言って確実に容姿の偏差値が高い、と言ったところだろうか。ここらへんで過剰表現は落ち着けることにする。

ともかく、かわいらしい形をした眉を折り曲げたアズラエルの独り言は止まる処とこがまるまるで無いように思われた。

「ほどほどに馬鹿でほどほどに空気が読めるような。崇高無比なアタシの伶俐れいりな渡る推理の、理路整然ながらも前衛的な言い回しに頭が追いつけず阿呆のごとくクスチョンマークを連投する愛すべき無能である助手が欲しいところなの。馬鹿だったら間違はなく白猿ハティだけど、レミゼラブル馬鹿すぎてきつとアタシの言わんとする意味すら理解できずに開いた口が塞がらない間抜け面が見え見え。それはそれで楽しいけどせつかくの真相説明シーンが盛り上がらないから白猿は採用見送りで死刑決定なの」

ここまでで、一息。これほどハキハキとした独り言も珍しい。誰が聞いてるわけでもないが耳の痛くなるような演説を延々と続けているわけで、並大抵に者であれば圧倒されそうだ。それだけの肺活量を無人地帯で惜しみなく披露しているのだから、少女の形をした魔王の大物ぶりが伺える。

一息を吸うと、アズラエルは再び虚空と対話するつもりか、口を開き

火炎が発生した。

硝子の塔の麓、下界が、大規模な紅蓮の炎で染まったのである。もしも塔の下に何者かが居ても、決して生き残ることは出来ないだろう。それほどの灼熱であった。

やがて、津波のように立ち上がった炎が、アズラエルが立つ塔の頂上を目指して駆け上ってきた。渦を巻き、とぐるを巻く。大蛇のような動きで塔に巻きついて上昇してくるのだ。

アズラエルは、驚かない。

見慣れている。親しんでいる。今となって、彼女と最も近い者こそ、昇り来る炎なのだ。

ただ炎の存在を確認すると、独り言の声の調子を少しだけ変化させていた。

眼下に灼熱を見下ろしながらの、苦笑の表情である。

「ファンファンは、名探偵助手ってガラじゃないしねえ」

すると、

「えー、なんのはなし？」

アズラエルのもとまで到達した炎が言葉を返した。

そして、見る見るうちに赤色の灼熱が決められた姿を象り始める。  
獣。

獅子と似ている。ただし、人の発達した指を生やす豪腕を垂らし、宙に塗り固められた炎の化生の瞳には獣には似つかわしくない意思が浮かんでいる。キラキラと、一仕事を終えた充実感のような光が

輝いていた。

妙齡の女性が発するような声は、機嫌の良さそうな響きをしていて、

「ねえねえ、ガラじゃないってえ？」

口を開けば愛嬌がある獅子の大きさは、少女のアズラエルよりも一回り大きいと言った程度。

魔神と呼ばれる者の中でも、烈火を駆使用する魔王の従者。

名をファムフリートと言った。

ただアズラエルは、こう呼んでいる。

「なんでもないの、ファンファン。それより、愚者の群れはどーなつたの？」

尋ねられて、炎の獅子は、すっかり気の緩まった顔で鼻をフムフム鳴らし、

「アズの言い付けのとーり。こんがりにしてきた」

報告に、アズラエルは笑う。二つお下げに結った髪をわざわざ手で弾いて、ババン！と腰に手を置くというオーバーリアクションで敵かに言い放った。

「ふふふふふふ。所詮はまやかし風情が現実界サイキョーのアズ様に逆らうなんて、消し炭になって風に漂うのがお似合いの末路なの！」

「風、ちっとも吹いてないけどねえ」



「余計な茶々はこの際無用なの！」

「この際って言うけどさあ」

幽霊のようにホヨホヨと空中を漂っているファンファンは、紫の空に反映する紫の大地を見下ろしながら疑問を述べている。

「この際、どうすんのお？ さっさと《偽者》殺して外に出る？」

偽者。

それはたつたいま、ファンファンが焼き払った生ける屍シベシベクケツツ集団のこ  
とではない。

偽者は、別にいる。彼女たちが偽者と呼んでいる者こそ、このデ  
タラメな空間を創り出した真犯人。少なくとも、この場ではそとい  
うことになっていた。

ファンファンの提案に、アズラエルはいささかの迷いもない笑み  
を浮かべると、すぐに背を向けてそれを隠してしまう。さながらに  
言うのだ。

「それも一つ。でも、選択肢は持てるだけ持つておくことが常勝の  
秘訣なの」

ビュッ！ とした勢いで、矢印の形状にも見える尾を使い方角の  
無い世界の一方向を刺す。

「あっち。白猿とシズネが歩いてる」

今度は逆方向に、ビュッ！

「向こう。こっちはアタシも知らない連中。獣人とチビが二人。今

さつき、変な男も加わったところなの」

最後に、まったく別の大地を示した。

「んで、すぐ近くに死神がトボトボ歩いてる。その他多数なの！」

「だからー？」

不思議そうにしている従者の声を聞いて、アズラエルは満面の笑顔で振り返っていた。腕を組んで、ご満悦そうだ。

「今後の方針を発表しまーす、なの」

ババーン！ 上空を渡る紫の源を意気盛んに指差して。

「完全なる様子見！ 楽しめるうちは楽しむのー！」

普段からアズラエルの事をよく知っている者であれば、まったく意外性もない決定。

「不可侵のアズちゃんは誰よりも高いところから迷える哀れな仔羊どもの拳動を逐一鑑賞し途方に暮れる姿を哄笑し、その不甲斐なさが目に余る場合は助けてあげるのもやぶさかではない。絶対絶命の瞬間に神々しく舞い降りるア、タ、シ。この効果は実に絶大だ！ やがて連中は確信するの。ああ……やっぱりボクラにはアズちゃんがないと駄目だ、って」

ここまでくると妄想の域だが、元来アズラエルの事を誰よりも熟知し、常に彼女の味方から離れないファンファンは暖かい視線を魔王に向けて頷いた。生暖かかったかもしれない。

「うんうん、そうなるよイーネー」

言葉を返した直後にファンファンの体はヒュルヒュルと縮んで、やがて子猫くらいのサイズになってしまった。

そのまま、フワフワ飛んできて、ポフンと主人の肩に乗る。

「じゃ、そうしまシヨ。みなみなさま皆皆様が困るまで待ちまシヨ。でも、あんまり遅くなるとアデルちゃんたちが心配するんじゃない？」

アデルの場合は運が悪かった。いや、運が良かったのか。

彼女はここに来ていない。

魔王の召使にして友人でもある彼女も、アズラエルたちが異変に巻き込まれた瞬間、一緒にいたはずなのだが。どうにもこの異次元への介入を免れたらしい。

精神が物質を模倣した空間。

人形の身体に魂が融合している状態のアデルは、おそらく空間に弾かれてしまったのだろう。ウサギの方は不明。ひよっとしたら何処かにいるかもしれないが、アズラエルは特に探してもいなかった。とゆーか、忘れてる。

そのため、魔王はなんの懸念も感じさせない表情で、

「飽きてきたら、さっさと偽者抹殺して終了だからノープロブレムなの！」

彼女の耳元で、ファンファンはケラケラと笑う。

アズラエルが飽きるまでというところ、決して長期間にはならない。最大規模の炎を行使するファムフリートは垢抜けた口調で、せいげき静激付かない声を漏らしていた。

「りょうかーい。なんだかタイムリミットみたいで燃えてきちゃう」

主従ともに、テンションが上がりだしていた。

主である魔王は方針が定まるや否や、殺しようもないテンションで片腕を前方へ翳し、思わず群集がジークアズラエルと叫びだしそうなポーズで自らが叫ぶ。従者が耳元にいようと構わず叫ぶ！  
ともかくにももの号令直下だ！

「そうと決まったら、ファンファーン！ さっそく白猿一行あたりから冷やかしに行こうぜベイビー！」

耳元で炎の従者も答える！

「ちよつと休んでからね」

ファンファーンの方は未だちよつとギアがトップに入ってなかったようだ。残念である。

既にフルスロットル状態であったアズラエルの皇帝ポーズも慣性を發揮することができず、のんびりしたファンファーンのを要求を聞いて、ただ、いそいそと手を下ろしていた。

少女の顔はややシブいことになっていたが、腕を組んで自制するように言う。

「うん、まあ、ファンファーンがそう言うなら」

「やあーん、アズ大好きー」

「あのね、たまにアタシ思うんだ。今みたく思いつきりタイミングがズれる事あるから。そろそろ段取り決めた方が良くないかなー？ っ  
て。ほら、いくら付き合い長くて、阿吽の呼吸の成功率100パ

「セントは土台無理な話なの」

「じゃあ、それ決めてから行こっか？ 私がアズの肩でマッチョポーズしたらミディアムサイズとか？」

やがて、硝子の塔の上で魔王はちょこんと屈みこみ、自分の肩で「フンフーン」とボディビルドの練習を始めてるミニサイズの獅子と相談を始めてしまう。

「うー、マッチョだとあからさまなのー。もっとこつ、気づく人は気づく！ みたいなのが理想。いっそ秘密の合図が敵にバレてアタシたちが大ピンチになる展開とか燃える。うわ、コイツラ気付きやがった、的なさ。その危機を乗り越えて初めてアズちゃんチームのさらなる飛躍に繋がると思っの。新必殺技とか誕生したり。あ、そうそう、まだファンファンにも言ってなかったけどアズちゃんズ奥義の新しいネーミングの構想が」

「ズレてる。ズレてるよー、話が」

この分だと、この二人がすぐに動き出す様子もなさそうである。さすがは世界地図で最も治安が悪いとされる魔国出身のコンビ。多少の異常事態でもまったく普段通りだった。

時間を無駄にしたくないので視点を換えようか。

なにせ、紫色が支配する世界には、他にも彷徨う者が残っているのだから。

名探偵の助手を所望するアズラエル閣下が臆面もなく「白猿」だの「バカ」と言い表していたのは、ハティ「C」Wの名前を持つ若き女流ハンターのことであり、さらに言うとな彼女は間違いなくハンター業界でもトップランカーに含まれる実力者であった。決して、軽々しくバカ呼ばわりできる存在ではない。悪い子は絶対に真似しないように。ハティは、たとえ子どもでも躰が悪ければ平気で打つような女性だ。保護者は閣下の言論的悪影響から自分の子を守る責務を果たすべきである。

それはともかくとして。

ズドーン！

と、硝子の大地が割れんばかりの轟音が鳴り響いていた。

ズドーン、また、ズドーン。

断続的に聞こえてくる。各方面から異空間と認識されている閉塞世界である此処も、ところにより静寂と喧騒の落差が激しい。

現在地は、さしずめ戦場と言った具合だろうか。

この音響を目覚まし時計の代わりにして目覚めない者がいれば、そろそろ脳のお医者さんに診てもらった方がよい。

とどのつまりはウルサイ地帯。

合間に子どももの高い声も上がっていた。

悲鳴ではない。

歓喜の声。

「すごいですッ！ ハチさん！」

ズドーン。

「すごくハンパないです！」

ドゴーン。

「これは絶対に恋しちゃいます！」

びく。

「もうっ、これなら女の子がいっぱいぜーったい、八チさんの姿に恋しちゃうに違いありません！ とにかく格好良いです！」

……………ズドーン。

バキ。ビキ           ボギゴキ！

常人離れした格闘戦を得意とするハティは、最後の一体である機械人形を組み倒すと、既に確認済みの回路をコブシで破壊し、それから無意味に何度も殴っていた。執拗に、何度も、何度も。これはヒドイ。本来、命が無いオートマータとも言えども、可哀想になつてくるほどオーバーキルをしている。何か嫌なことでもあったのだろうか。

結局。

機械人形の大群を苦勞もなく殲滅したハティの何処か殺伐とした背中とは対照的に、無邪気で朗らかな声だけが、今わの現場に響くようになっていた。

「やった！ やりました！ 八チさんの大勝利です！」

そう言いながら兎のようにピョンピョンと跳ねているのは、中性的な容姿をした線の細い少年である。少年と言ったが、少年だけどもこれがまた別嬪なのである。リバーワールドに飛ばされるまでは共学制の高等学校に通っていたツキノハシズネくんだったが、もしも男子校に通っていたら「まあ、シズネでも、いいよな。じゅうぶんだ。じゅうぶんすぎる」と血迷ったクラスメートたちの視線に

晒されていたかもしれない。

要するに、ちょっと、かなり女の子っぽい所のある顔立ちだった。そんな彼が大絶賛する先、機械人形の本来あった造形をミジメなものに変えてしまった破壊者は振り返る。

ややや。

めちやくちやフキゲンそんな表情ではないか。

「ああ、もう……、ピーチクパーチク実況うつせんだよッ！ 俺が戦ってる時は黙ってる！！」

再確認しておく、ハティは女性である。

しかし、シズネが中性的であると同時に、ハティもまた中性的と言って良い。

特に今の、苛立った感じの表情では、瞳が切れ味鋭く傾斜して、眉間には深い縦シワが密集しているため、凛々しい、どころかガラが悪いっいたらありはしない。流れるように整った身体は女性の形をしているが、それでもこの顔で睨まれたら酒場のゴロツキも一瞬迷うはず。あ、俺、負けるんじゃない？ その上で、実際にポコポコにされるのがオチだ。

そんな怖いハティさんにキラキラと睨まれても、しかし、さつきから喜んでいるシズネは一向に収まるうとはしなかった。

両手をグツと握り、目をキラキラさせ、うんうん頷きなら感動を伝えてくる。

「だって、応援せずにはいられません！ あんなにいっぱい居た怖いロボットさんを、あっという間に倒しちゃうんですから。僕はハチさんから目が離せません！」

真っ直ぐ過ぎる。

太陽を閉じ込めたように輝く瞳を向けられて、ハティは「ん、ぐ」



と、飴玉がつつかえたような顔を浮かべる。手の甲で鼻の下を擦りながら、シズネにそっぽを向けてしまった。

それは最初の怒鳴った時よりも、ずっと小さな声で、

「大したことねえよ。ぜんぜん。すっげえ弱かったし」

言って、破壊した機械人形の頭をガツンと蹴っていた。

「……見たことねえ型だな」

ハティとシズネが、この空間に囚われて、しばらく。

定期的に発生する地震と現れる不審な敵。吸血鬼、ゾンビに機械兵

端的に言えば物語作品の悪役。誰もが知っていて、しかし、ハティが実物を見た記憶がない連中に何度も襲われた。

そのたびにツレであるシズネが、喜んだり悲しんだりしている。

喜ぶ時は今のよう、敵が生ける存在ではない時。子どものように興奮し、ハティのことを応援する。

悲しむ時は敵が生きとし生けるものだった場合。絵本の挿絵のようなドラゴンの群れをハティが狩り殺した直後には、あまり良い顔を浮かべていなかった。

ある日、空から落ちてきた少年。

成り行き任せで始まった彼との旅も、既にそれなりの日数が経過していた。

そして、旅路の途中で起こったのが、今回の異変なのである。

ある瞬間から、ハティは白昼の夢から覚めたように紫色の世界に立っていた。情報収集の一環として街の酒場に立ち寄った時のこと

だ。

ムカつく客がいて、その夜はハティの機嫌もあまりよろしくなかったこともあり、その客が女性についての下卑た内容の発言をしながらカウンターへ向かおうとしたところに足を引っ掛けてやったのだ。

喧嘩になった。

結果がどうなったのかまでは記憶にない。

最後にシズネの諫める台詞が聞こえてきた頃に、ハティの視界は紫色に染まりあがったのだ。

つまりは、此処。硝子の風景。

しかし、である。

その時は周囲に、シズネの姿はどこにもなかった。

非常に慌ててハティは少年のことを探し回ったものだが、無事に見つけ出した今となっては呆れてしまう。

「よく考えりや。お前もよ、シズネ」とハティが、少年の方へと振り返る。「こんな場所、ひとりであんなにうろついて、よくもまあ無事だったよな」

いわゆる、モンスターがウヨウヨしている謎のフィールドだった。それでも見た目頼りげのない少年、シズネはあっけらかんと無事であった。ハティとしても何よりだったが、ただ、彼の悪運の強さに呆れてしまっただけである。

シズネにも武器があることは当然、仲間のハティも熟知している。しかし、ハンターであるハティと違い自称「コーコーサー」を貫き通すシズネ少年の戦闘が老練であるはずもなく、たいてい一種族が群れで襲ってくるような異空間だ。雑魚は雑魚でも大勢の雑魚。さきほどの機械兵にしてもシズネだけではとても捌ききれなかっただろ。

そんな少年が、胡乱な硝子の箱庭で、わずかながらの時間でも単

独行動をされていて無傷であったことは奇跡に等しい。  
それについてシズネの証言では、

「ハチさんと会うまで、僕はモンスターと遭わずに済みましたから」

「なんだよ。それじゃまるで俺が危ねえ連中を連れてきたみたいじやねえか」

「そんなことは言ってませんよお」

不機嫌そうなハティに対して、シズネはニコニコと。

「ああ、でも。ハチさんの言う通りの可能性があるかも」

「ああん？」

ニコニコをいったん消して「うーん」と思案を始めた様子の少年に、ハティはすこぶる怪訝そうな顔を浮かべる。

やがて少年は閃いた表情を快活に上げてきた。

「そうですね、きつと！ ゲーム風に言えば《強い奴に会いに行く》、というか。ハチさんは、ひよっとしてモンスターさんたちを惹きつける不思議な魅力に溢れてるんです」

この世で最も不利益な魅力だろう、それ。あと、この少年がよく口にする『ろーるぶれいんぐげーむ』という代物を、ハティが想像できた試しはない。

シズネはなおも言ってくる。

「類は友を呼ぶとか」

「ざけんじゃねーよ、しばくぞクソガキ」

喉元に噛み付きそうな表情で口を開くとハティは、それ以降少年に背を向けて歩き始める。女性らしい、高い声が発するのはたいてい暴言ばかりで、旅路を共にしているシズネに対してもだいたいはそういう態度で通っていた。だいたいは。

シズネが見つからなかった時は、不明瞭なモヤモヤで焦っていたハティも、こうして再会にした後だといつも通りの心持ちに戻っている。

いつも通りの頭で、考えてみた。つまり冷静にだ。

さて、どうすれば、この気味の悪い景色が終わってくれるか。

ハティとて、これまで数多く修羅場を経験してきた辣腕しつわんガール。多少の異常事態で狼狽することはなく、そこで少しくらい不安げな表情を見せてくれれば可愛げもあり異性の気を惹きつける美人に違いなかったが、そんな情感など入り込む余地が無いほどに丈夫な顔付きで一度「ぺっ」と唾を吐いた。吐いたあと、彼女は空を睨む。瞳に浮かぶのは不安よりも、強い敵意だ。

独り言。

「あー、うぜえ。どうすつかなあ」

後ろからシズネが軽やかに現れた。タタタ、とハティの前に出ると幼さの残る笑顔が明るく振り返ってくる。

「ケイセラセラ、だよ、ハチさん」

「あ？ なんだよ、それ」

まるで聞いたことも無いフレーズに、ハチが眉間を絞ると、好対照の表情をしたシズネはパツと、花咲くように唇を広げてみせた。

「なるようになるさ、って意味の魔法の言葉です。きっと時間が経てば事件は解決に向かっていくんですよ」

ハティは女性なのに大口を開けて欠伸をかいたあと、少年のポジティブな台詞を両断している。

「すげえ受け身。それキライ」

ブウとシズネの頬が膨らんだ。あどけない彼の表情がちよつとその、アレだったため、ハティは思わず顔を歪めてしまう。ついでに耳にも熱が通った。

誰にも気づけない範囲で紅潮してしまったハチの向いで、少年は尖らせた唇でこう言っている。

「いつもいつも、それキライあれキライってハチさん、子どもみた  
い」

ハティは目を剥いた。

「おめえにだけは言われたくないよなっ!? なッ?」

しかしシズネは頑<sup>かたく</sup>なだ。

「なんとかかりますよ。なります。だってさ」

それはもう朝露<sup>あさつゆ</sup>のような表情で、

「またこうやって、すぐに再会できたんですから。相性はうちし無敵です」

ウープス。ハティは前のめりに卒倒しかけた。

ハティは、この少年が愛おしく思う瞬間があることを自覚しつつある。しかしながらム力つく瞬間も多い。

ただどやっぱり、居心地は悪くない。よく、わからない。

ハティは額を押さえ、前傾してしまつた重たい頭を起こしながら呟いた。彼女は、たびたび抱えてしまふ怒りの正体を知っている。

「なるようになって……たまるかつての」

シズネには決して聞こえない小声。今、自分が浸かっているものがぬるま湯なのか、冷水か熱水かも判然しない心境と似た口調で吐露した。

要するに、自分とシズネは何もかもが正反対なのだ。彼女が、ここにいるクソガキと旅をしていて時に「楽しい」と感じている自分を見つけることもあるのは、つまり、シズネはハティがまるで知らない存在だからかもしれない。

そして、時に、この少年のことを彼女が、たまらなく憎たらしいと感じてしまうのは、つまり、自分と別種の存在だからなのだろう。理解できないし　理解されない。

簡単に言えば「刺激的」。良くも悪くも。

シズネはハティの心を揺り動かすことが多かった。

若干、イライラと、またドキドキとってしまったハティであるが、こんな不毛な場所で怒鳴りを上げてても疲労しか生まれなさそうだと判断し、少しだけ自制し、頭を掻くと素直ではない表情で顔を上げたのだ。

「なるようになる、って、どうなるんだ」

都合の良い言葉が返ってくる。

「それは神様にしかわかりませんよ」

「怪しい宗教かよ。たく」

自分の心が落ち着いていくことを確認すると、ハティは改めて大きい声を出した。

「あーあ！ やってらんね！ 食うもんもありやしねえし」

先述の通り、ハティが異空間に飛ばされたのは酒場に居た時のこと。

金品を除いて、すべての旅具は宿の部屋へ置いてきてしまった。そのため、この正体不明のフィールドから脱出するのに数日間を必要とした場合、やがて来るだろう空腹に備えて食料を調達しなければならぬ。

「まあ、次に出たバケモン、くやいいか」

なんごとなく結論したハティに、ようやくシズネがネガティブな表情に染まった。

「え、ええ……？ 食べる？ モンスターアを？」

怖気づいた少年が愉快だったか、ハティは牙を剥くように笑みを作る。熟練した女流冒険家の発言はどこまでも豪快だ。

「火い通しゃ、《なんとかなる》だろ」

シズネはここに限らず、これまで出会ってきた魔物たちのうち、主にナマモノでも想像してみたのだろうか。少し顔を青くすると、やがて唸りを漏らす。

「うう。できれば普通の物が食べたいなあ」

「いいか、クソガキ。よく聞け」

いつからかハティの表情は、打って変わり機嫌の良さそうなもの  
に変わっていて、少年の頭の上に手を置くとまったく乱暴に揺り動  
かした。シズネはもう一度、「うう」と言う。

マイペースで鈍感なシズネに振り回されている自覚ならばある。  
なので、相手が多少の弱味を見せた瞬間、それをハティは見逃そう  
としなかった。性格ゆえ、である、

「なんとかなる、じゃなく、なんとかする、だ。テメエの世界じゃ  
どうだったか知らんが、こっちの世界の神様はお耳が聞こえねえの。  
なんにもしちゃくれねえよ。祈るより、ゲテモノ食った方が確実だ  
ぜ？」

ハティが相手を攻撃する時は、確かな自信がある時である。そう  
でない場合は逃げるを選択する。そうやってこれまで生きながらえ  
てきた。

自分が絶対的優位だと確信している時は、相手に何を言い返され  
ようが揺らぐことはないし、あんまり煩ければ最終的に暴力に訴え  
かければいい。むしろ、相手が反抗してくれた方が、自分はさらに  
攻撃的になれるし「すつきりする」とハティは考える。



だから今も、シズネをイヤミに子ども扱いして、それで少年がムキになって反発してくれれば理想だったのだ。そうすれば、いくらでも上から押さえつけられる。しかし、

「なるほどお！」

ハティが手を乗せる小顔が力強く頷く。

「一本取られました！ 《自分でなんとかする》の方がカッコいいです。今からそっちに作戦チェンジですね！」

「……………」

シズネは、こういう性格なのだ。  
簡単に言えば 手応えが無い。

イラつかせてやりたいのに、ほとんどの場合アイツは笑顔を返してくる。

「好き嫌いはいけませんよね、うん！ 食べます！ 何でも文句なく食べますっ」

反発どころか全面的な受け入れ姿勢を見せ付けられて、逆に毒気が抜かれてしまうことは多い。

「いや……無理はしなくても」

「いえ、がんばりますっ。旅をしてるのに、食べ物で贅沢なんて言っちゃいけませんよね」

「まあ」

「ハチさんは大人だなあ。素敵です」

キラキラ暖色スマイルから、ハティは再び顔を背けた。

「うっせ。テメエがガキなだけだ」

自分の顔を隠すように今度こそ、佇むシズネの横を通り過ぎるとしつかり歩き始めたのだった。とても早足で。口を結んだ勝気な瞳を、奥の景色へ向かわせる。

顔が、熱くなっていた。

ちよっと悔しいやら、他にもイロイロ。

やがて、少し。

広漠とした紫色の地。出口の見当も付かない空間に迷いこんでから、幾つかの異形の敵意を押しつけてきたハティとシズネであった。しかし、機械人形の次に、目の前に《舞い降りた》存在は、今までと雰囲気異なる。

彼女は人間の形をしていた。

羽毛のように淡い、銀白の光。

雪のように降り出し始めた中。ハティが纏う雰囲気は瞬間的に警戒色を発する。

「誰だ、てめえ」

「あっ」とシズネの声。

もとからつぶらであった男の子の瞳を、いつそう大きく広げて、  
驚いた

「あの人」

呟くシズネのずっと前方で、降り始めていた雪を真似る光が収束する。

翼を象った。

現れた女性の影が何一つ発言することなく動き始めたのだ。  
それを見た瞬間に、ハティは彼女が何者が断定する。

彼女は 敵だ。

「ざけんな！」

相手の外見を見定め尽くすよりも早く、突進してきた彼女にハティは思わず悪態を吐き出しながら、シズネの方へと咄嗟に跳ぶ。  
女子と変わらぬほど細いシズネの腰を抱きかかえるように持ち上げると、さらに地を蹴って、敵の進路からの離脱を図った。  
風が切り裂かれる音。ビュオつと通り過ぎる。さつき垣間見た時に、ハティはこれだけは確信していた。

敵は剣士。今の一瞬は凶刃が二人に迫ってきたのだ。  
頬を疾風が撫で回した感触とほぼ同時に、ハティが身に付けていたアームガードが粉碎し、腕を軽く弾かれる。直撃は免れ、痛みは無い。

「ちッ！」

一閃は避けたものの、襲撃者は尋常でない手練ということも、す

ぐに理解してしまう。

「現れた直後から距離を詰められたのは一瞬だ。その敵とはだいぶ離れていたのに、ハティは迎撃でなく回避の選択しか取れなかった。しかも、いくらシズネというお荷物があっても並の相手に防具を掠められるというへま。

見切る猶予ゆいよが無かったのだ。どうにか回避したが、九死に一生を得たとも言つ。

最初に敵が見せたのは超人的な突進。そしてハティもまた、非凡な運動能力で大きく跳躍してみせた。人間離れたジャンプである。

## 《魔》

そういう存在がある。

自然界や生き物の体内を巡る、可逆性かぎやくせいエネルギー。《魔》はさまざまな性質に変化し、さまざまな事象を引き起こす。時として《魔》による営みは「魔法、魔術」とも呼称を変える、或いは人に与えられた可能性

ハティは決して魔法使いではない。

しかし、そう呼ばれても不思議はないほど《魔》を巧み扱うことができた。炎や雷や嵐を生み出すわけではない。そのように派手なものではない。あくまで格闘の補助としての地味な力が多いが、さながら強力に違いない。

たとえば、わけもわからぬまま肉薄にくはくしてきた白銀の女性と、距離を置くためにハティが使ったのは「弾力」だ。これは筋力の補助である。足元に生み出した《魔》に弾く力を持たせて、自身の筋肉量以上の跳躍力を実現したのだ。

バヨンと跳んで、シユタリと着地。肩に担いだシズネを乱暴に地へ落とすと、グワッと振り返った。

「なんだあの、クソアマ」

着地後。問答無用の剣戟を繰り出してきた白色の影とは、再び相  
当の距離が開いていた。

改めて見ると、柄にもなく天使かと思うような風貌した女性であ  
った。

まあ、鎧を身に付けた天使というのも物騒だし、何より

「図々しい服装しやがって」

セクシイ、という表現は清纯っぽい天使には似合うまい。

長剣を片手に携えた、騎士風の女性の胸元はバツクリと開いてい  
た。ざつくばらんに言うところポロリとしてしまいそう、な？　しかし、  
あの女性騎士はいかにも強そうだ。いかに激しく動こうとも簡単に  
はポロリとさせないだろう。それはハティとしても助かる。シズネ  
がいる手前、相手にポロリとして欲しくない。  
なので、ひとまずポロリについては忘れる。

「おい、テメエ」

一撃目以降、女騎士はこちらへ目もくれず、剣を提げたまま何処  
か虚空へ向け佇んでいる。そこへハティは声を上げた。

「いきなり、殺す気できやがったな。殺すぞ」

「……………」

女の騎士は無言で、ただ、ハティの剣呑な声にゆったりと一顧し  
てくる。首を回すだけの動作で、蛍と似た光が渦巻く。

うっかりすれば見とれそう。幻想的、人ならざる者の雰囲気であ

った。

しかし相手は声も上げず、遠くから向けてくる表情にも感情は見えない。

代わりにシズネが口を開いた。

「やっぱり、あの人だ」

「あ？」

ハティは敵から視線を外さず、聞き返した。

「んだよ、シズネ。アイツを知ってんのか」

「前にも言いました。僕を、空から落とした女の人です」

「ああ」

確かに、この少年が現れたのはお空の上からだ。落下の直前に天使に出会ったとも、そう言えば少年が語っていたかもしれない。

ハティは鼻を鳴らす。

「へん。そうかよ」

拳骨を鳴らした。詳しい話をしているゆとりも無い。いつまた、女が刃を迫らせるか注意は怠れなかった。

そのため彼女は勝手な解釈をする。

「キナクセエな。アイツが、このヘンテコな空間を作ったか」

シズネは、ハティが暮らす大地とは違う世界からやって来た。

もしも、異世界があるのだとして、シズネにとっての水先案内人を務めたのがあの、天使のような剣士なのだとしたら、今、再びハティもろとも奇怪な空間へ引き込んだ犯人も彼女だという可能性は充分にある。

「ふんじばつて問い詰めるか。もしかしたらよ、シズネ。お前も、もと来た世界に、……いや」

そこで鼻腔をせばめるような表情を浮かべるとハティは、不自然に呑み込んだ言葉を改めて、継ぎ足した。

「そう簡単に、生け捕りさせちゃくれねえかな」

向こう。

一切物音を発しない白銀の騎士は、静穏を纏ったままゆっくりと動き始めていたのだ。

「……………」

まったくの無言。無表情。

こちらから見て半身だった態勢を開き、正面を向けてきた女性。

相手の拳動を凝視しながらハティは腰を落とすと、隣に囁きささやいた。

「シズネ、逃げとけ。ああいうタイプの相手に、オメエは邪魔だ。ものすごく」

さっきの馬鹿げたスピードで攻め込まれたら、いくらハティと言えどトロいシズネに構いながら戦うことはできない。たとえ足手まといがいなくても勝てるかどうか不明なのだ。

でも、足手まといが言う。

「ええ？ 戦うつもりなんですか。やめましょーよ。あの人すごく、強そうだし。情けないですが降参しましょう」

ハティは口をひん曲げて答えた。

「馬鹿野郎かオメエ。降参は相手が持ちかけてこねーと成立しねえんだよっ」

向こうが殺意ムンムンだったら、掲<sup>かか</sup>げた白旗ごとバツサリ斬り落とされるのがオチである。

もとより降参や退散などハティのガラではない。

「ああ、もう」

左の掌に右の拳を打ちつけると、ハティは自分以外の者に言うてやった。

「死んでも恨むなよ」

濁<sup>にご</sup>るスミレ色の背景に、淡く光る騎士が佇<sup>たじ</sup>んでいる肖像にはかなり怖いものがある。

寡<sup>か</sup>黙<sup>もく</sup>な銀刃の天使からは、今にも動きだしそうな気配がした。



「あ、 はあん」

アズラエルは滅多にしない微妙な笑い方をする。

どうにも、愉快的驚きがあったようだ。

シズネとハティの二人を冷やかそうと思っていた魔王閣下であったが、その直前に二人は襲撃された。そのため結局は彼女も顔を挟むタイミングを失い、少し離れた高台からファンファンの陽炎かげろうを使つて傍観する格好になってしまう。

その襲撃者のことなら、アズラエルもよく知っている。

かなり厄介な存在。

ヴァルキリー  
戦乙女

「いやはやアハアンなの。まさか鷹派たかはどもの《怪物》まで、こんな箱庭に溶け出してくるなんてね」

少女は笑みのまま。

その肩、未だにちっこいファンファンが彼女の耳に擦り寄るようにして尋ねていた。

「んー？ アズが言う偽者って、ヴァルキリーちゃんのことじゃなかったの？」

先ほどとは場所を移してもガラス体の上ということだけは変わらない。眼下では、ファンファンが作り出した陽炎が揺れていて、まるで水面が景色を写すように、ハティたちを襲撃した危険人物の様子を捉えていた。白銀をまとうかの襲撃者は、一部では《脅威》として有名な、某国の守護者。アズラエルの立場からしても敵勢力に

含まれる、厄介な怪物であった。

その戦乙女が出現した。

しかし、ファンファンは鼻を鳴らすと、見たまんまを述べる。

「あのヴァルちゃん、本物じゃない感じがするなあ」

アズラエルは大きく元気よくうなづく。

「アレもアレで偽者なの。本物の抜け殻って感じ？ ま、ヴァルキリー級なら《まやかし》でも拒絶できるんでしょ。わからないけど。この私の、真理と近似<sup>きんじ</sup>たる第六感がそう告げてるわ。あのヴァルキリーは、拒否られた《まやかし》が苦し紛れに創り出した残像ってところなの、おそらくきつとたぶん間違いない」

アズラエルの憶測かも断定かも付かない見解に、ファンファンは丸っこい頭を傾けながら、それでも悠長に首肯していた。

「なるほどお。なんでもいいけどー。ハティちゃんたち、ヤヴァイんじゃない？ 偽者でも、戦乙女は戦乙女でしょー」

「あの《ヴァルキリーもどき》が本物の半分でもカヴァーしてればね。ヤバイの。白猿も人間にしてはよく動く方だけど、所詮は人間風情に敵う相手ではないから」

おもしろおかしそうに唇を歪めている閣下に対して、ファンファンの猫科の表情には、知人に対する若干の気遣いが滲み出ている。

「アズの方針だと、困ってたら格好良く助けてあげるんじゃないのうー？」

「どっかしらん」

アズラエルの黒い翼は今も綺麗に折りたたまれたままだ。ただ、同じ色をした鋭利な尻尾を上下に動かし風を切ると、さらに唇を吊り上げる。

「常勝無敗のアズちゃんとしても、怪物の戦闘を監視できるのは貴重な機会なの。せっかくだから、白猿たちがどう戦うかしばらく観戦しようと思う」

景気よく動いていた細長い尾が、ある時からアズの片脚にシュルリと巻きついて止まった。

魔王少女は「……それに、」と漏らす。

「言ったでしょ。アタシの第六感は真理に等しいの。なんとなく、大丈夫な気がするのよね。白猿」

そこまでで、耳元の居つくミニマムサイズの赤獅子が笑い出した。

「なんだかんだ、アズはハティちゃんのこと買ってなーい？」

最終的にはアズラエルの表情が、笑みよりも渋いものに変わる。

「ありえないありえない。全財産をヴァルキリーに賭けても申し分ないの。でもまあ、勝敗とは別に、くたばりはしないと思う。シックスセンスがヒシヒシ」

遠くの空から衝撃音が直に届いてきた。

本格的に始まったようだ。

ガラスが突き出た高見、アズラエルの足元に広がる陽炎の中でも、

一介の人間と、天使を模した怪物の架空の対決が実現していた。すぐ、アズラエルの表情も微笑に戻る。

思っていた以上に、退屈せずに済みそうである。違いない。ただの勘であった。

襲う者と襲われる者。

戦闘が成立し、ハティはというと二度、敵の攻撃を防ぐことに成功していた。

いくら言っても逃げようとしないうズネが狙われたのは、白影の麗人騎士が動き始めた二撃目のことである。邂逅かいこう時と同様、アホかと思う速度で敵は迫ってきた。

しかしながらハティは動体視力、運動能力ともに優れている。敵が素直にシズネを狙ってきたのなら、今度こそ対応することはさほど難しくはなかった。突進してくる先に割り込んで、高い金属音が上がる頃には騎士の動きは停止する。

そして二撃目、相手が返す剣も防いで、今現在となる。

ハティと白銀の騎士、両者の衝突には金属音が伴うことは多い。武器もなく、素手であるハティが、剣士の攻撃を抑えることが可能である理由もこれまたにして《魔》であったのだ。

大きく跳躍する時にハティは弾力を用いた。《魔》を反発力が高い状態に練成し、バネのようにして跳ぶのだ。

それと同じように、斬れ味鋭い刃ブレイドによる攻めを防御するためハティが使ったのは、単純な《硬さ》である。ハティに宿る魔を一気に

凝縮させ、密度を上げると、とてもとても硬い《魔》の塊が練成できる。よくハティがゴロツキを脅すために岩や鉄板を笑いながらコブシで打ち砕いているのは、魔がそんな効果も持っているからだ。それこそ、三流剣士が振るうナマクラソード程度はアクビまじりに素手でやっつけちゃうレベルなのだが……なのに。

「うぜえっ」

敵の至近距離でハティは吐き捨てる。

二度目の斬撃を右手の甲で往なした瞬間に、コブシをコーティングしていた《硬い魔》がビキビキパリンと情けない音を上げて、霧散してしまった。ダイヤモンドよりも硬い自信があったのだけだ。

それでも殺意を含む剣筋をズラすことには成功。しかししかし、これで右手は生身と変わらない状態になってしまったのだ。つまりウゼエ。ハティの利き腕はスタンダードである。

「ぶっ殺した後でその剣、売り飛ばしてやるっ」

声には出さず呟きながら、目の前に居座る冷気のような女の顔に硬くなっている左コブシを繰り出した。

長剣が自在となる間合いではない。距離的にはハティが有利。

白騎士が、後退する。

瞬間。

「予想どーりッ!」

正拳の格好を取っていた左手をそのまま大きく振りぬいて、ハティは身体を反転させると勢いを付けての後方内回し蹴り。相手が退いたところの腹部にちょうど突き刺さった。この女、ハティ、口調

も態度も粗野だが格闘に関しては洗練されている。  
白騎士は弾けて飛んだ。

「ハチさんっ」

なんだかんだで逃げようとしてくれないシズネの、熱のこもった  
声が届いてくる。

しかし、伝えてくるのは喝采ではなく、非難であった。

「ヒドイですっ、痛そうです、やりすぎです！」

思わずハティは敵から視線を外してしまう。  
首を回すと牙を剥いた。

「クソ、バカ！ 加減なんてしてられっかよ！」

殺す気で襲ってくる相手ならば、こちらも殺すつもりで反撃する  
のがアタリマエ。でないとな殺されてしまう。

頓狂な野次を放った少年を一瞬は睨み付けてしまったハティであ  
ったが、その無意識の行動を自覚すると寒気が走った。

決して目を離して良い敵ではない。

殺気などは感じなかった。

しかし。

ハティは脊髄に水を流し込まれたような悪寒に従って、顔先を戻  
すよりも左方へと転がる。

風の断末魔が耳を通り過ぎていく。寒気が勢いを増した。

「　　つうツ!?」

左肩に激痛。

今度こそ、シズネが発したのは安否の声らしかった。

「ハチさんッ!」

通り過ぎていった疾風の正体は言うまでもなく、先ほどハティが蹴り飛ばした通り魔天使だ。もう復活した。ノーダメージなのか。内臓が台無しになっていても不思議はない手応えであったのに、瞬間に態勢を立て直して斬りつけてきた。

どうにか地面を巡って立ち上がった時、左肩に熱い物を感じる。視認は省いたが、間違いなく深く斬られている。出血している。

「クソめっ」

そろそろ激痛。ぶらんと垂れた左腕。指は動く。神経がヤラれていないのは幸いだ、力が入らず健全に機能する状態ではなくなってしまった。

一、氣、に、不、利。

「……………」

風神に寵愛ちよあいでも受けてそうな白刃の麗人はハティの肩を斬り裂くと、一つの物音も立てず停止し、一転して静かに凝視してくる。気味の悪い女だ。緩急の境がまったく見当たらない。血眼になって殺しに来る雰囲気でもない。

少しの猶予があるのならばハティは叫ぶ。

「シズネッ!」

少年はハティを置き去りにする気も無さそうなので、利用させてもらうことにした。黙って突っ立っていられても有益は一切ない。

「弓を出しなっ」

よって、謎の騎士の視線はシズネへと移ることになった。

少し離れた位置に立っていた線の細い男の子は仲間の声に、身体を強張こわばらせている。白銀の防具をまとう女性の襲撃者と目が合つと、さらに表情を緊張させた。

敵が、ゆっくりと長剣を持ち上げる。

どちらかと言えばハティの狙いはソレであった。

「しゃ」

息吹いぶきを押し殺し、自分に出来る最も静かな動作で地面を蹴る。先刻、余所見をしている時に一撃をもらったのだ。その仕返しである。シズネの「弓」というのは有名な呪具だ。いまだに謎だらけのアーツファクト、その一つ。それなりに強力であるけど、しかし温厚な彼がそうそう簡単に殺傷能力を伴う弓を人に対して扱えるわけもなく、ハティは少年の援護に期待などしていなかった。

ただ、敵に、別方向からの攻撃を意識させられれば僥倖たふし。

襲撃者がシズネへ顔を向けた直後には、左腕をぶら下げた状態で走り出し、澄ました顔面に蹴りでもくれてやろうと画策したのである。

「……………」

迫ってきたハティを襲撃者は一瞬で察知したようだ。一瞬とは、ハティがあゝの距離を詰め、至近距離に入るのに十分な時間なのであ



る。

数度、両者は激突することになった。

戦うことを生業なりわいにしているハティは「傭兵」と表しても差し支えない人種だ。死線が日常化する次第に危機感覚は麻痺していくもので、時として自分を殺しかねない強者との対決に楽しみを見出すこともある。

「はんッ！」

ゆえに今の刹那、《魔》を迸らせ騎士を蹴り上げたハティの表情は、笑っていた。

一時はシズネに矛先を向けかけていた相手も、静かに急遽こちらへ体を回してくるが、しかし先にハティの右脚が相手の首筋へと迫る。生命線を断つための一撃。

軽く避けられてしまう。

敵の反応も化け物じみていた。ハティの刃物に負けず鋭い上段蹴りを、身を屈めてやり過すと低い位置で長剣を持ちかえたのを横目で見て

「ち」

やっべえ、不利な姿勢。イヤーな、上手い避け方。

ハティは眉間を寄せるしかない。直後に来る相手の剣を防ぐパターンも思い付かないし、これは死んだかもしれない。と、自分の末路を客観的に判断していたが、幸いなことに生き永らえることができたようだ。

キィィイン

高い音。

それが鳴り響いたかと思うと、女騎士のロングソードが不自然に弾けた。

シズネだ。

いつの間にか弓矢のアーティファクトを取り出し、厳しい顔付きで構えている少年が向こうの方に立っていたのである。あの場面、隙だらけになっていたハティを斬り殺そうとした女性剣士のロングソードを呆れるほど正確な射撃で叩いてみせたのである。

足手まといとは言い過ぎた。

射らせばシズネはスゴイ。

たとえ人の命を狙える性格をしていなくても、動きの中、敵が構えた得物の刃の部分に矢を当てる技量は少年らしからぬもの。とぼけた顔をして、才能と共に努力してきたのだろう。

自分を斬り捨てることになっていたはずの長剣は飛矢により横から叩かれて、ハティの視界の際では、女性の騎士は機械的な動作で射手の方角へ視線を回している。

それはハイキックの態勢から立ち直るのに十分な猶予。

一時でも、二対一が成立した。

ハティとしては爽快だった。

「グッドだ坊や！」

両足を地面に着地するとハティは回転の勢いを殺さぬまま（今度は大振りを遠慮して）右の膝蹴りで襲撃者の顎を狙う。先ほどは敵を殺すつもりでの蹴りであったが、次のこれは防御させるための攻撃である。まあ、そのままガツンと当たればそれはそれでラッキーだ

が、狙い通り騎士乙女は後方に身を退いてハティの膝蹴りをやり過ぎしていた。

つまりは、布石<sup>ふせき</sup>。

自分が死ぬか、相手が死ぬかは次で決まる。

殺し合いに出し惜しみなどしてはいられない。

「くそアマがつ」

膝蹴りの動作のまま、ハティは下がった相手の方へ前に出る。

銀色の騎士は下がりながら剣を引き 斬撃の姿勢。

構うものか。

ガードや反撃の択を取らせるために、一度、敵を下がらせたのである。軸足を着いたタイミングを狙う。

この距離がベストだ。

「手こずらせやがって!」

長剣との、正面同士の対決にハティが選んだ手段は「全力で殴ることである。

全力。それは、運動能力的な意味合いは勿論、利用できる《魔》の全てを己の右腕に押し込めた、あらゆる意味での全力パンチであった。左腕を負傷していなければ、もう少し格好の付いた突きであったらろう。

ハティの《魔》の量は非凡。

その全てを片腕に集中させれば、煌々と周囲が輝きだすほどの迫力であった。さながら光るパンチ。

敵が構えたロングソードごと、へし折り貫く気概で捻り出したのだ。

敵も、狭い距離で正確に剣を振りぬく。

「  
」  
常人が実況解説を依頼されても困り果てそうな速度で両者は衝突した。

何故だか、カッと閃く。

「ふえッ？」

間の抜け声をハティは口から漏らす。

白一色。右腕を繰り出してからは何も見えなくなった。なんじゃこりゃ。まるで爆発だ。ハティの文字通り「必殺」と言ってもイイ右ストレートに、相手を爆発させる効果などない。

つまりは、敵が何かをしたのだろうか。輝いたのは敵でも自分でもなく、狭間に振りぬかれたロングソードであったのかもしれない。どうなったのか、理解が難しい。

音は聞こえない。突き出した右腕には未だ何の感触も届いてこない。  
い。

ただ。

この光に包まれると自分が死ぬことになる、そんな漠然とした予感が脳裏を通過していったような。しかし。

「  
ぼちぼち」

ようやく。

あどけない少女の声が聞こえた気がする。

「ちょっと甘いけど、及第点なの」

最終的に視界へ飛び込んで来たものを、ハティはパツと目で判断することができなかった。

人の顔よりも大きく、丸みがあり、真っ赤。赤色は光沢がテラテラとしていて、一部が細く尖がって、さらに一部はシリのように割れている、まるきり球体というわけでもなく　ああ、わかった。

ハティは理解した。

女の子がよく描く、赤いハートマークだ。

白色となった視界にプクリと浮き出している。

なんでハート？

激しい光がハティを通り過ぎていった。

ハティとヴァルキリー（偽）の勝負は相打ちと言ったところだろうか。

偽者である戦乙女は闘争心だけが強い状態であったようで、ハティの破壊力だけは高い馬鹿力パンチを見た直後に、明らかな反撃本能を見せた。

つまり、本物が扱う《魔剣》の真似事。

上空から見ていたアズラエルの目からでも、かなり不出来であったが、猪突猛進が好きな白猿ハティの命を奪うには充分な威力だったのかもしれない。今となっては不明。

おそらく、あのままぶつかっていれば両者ともに、くたばっていた可能性がある。

そのため結果的に、アズラエルはハティを助けてあげることにした。

もともと、あのヴァルキリーの偽者なんていう危険極まり無いブツを放置しておく、あとあとになってアズラエルにも面倒が回ってくる可能性が高いため、パチモン戦乙女の不安定な内に叩いておくことにしたのだ。とは、後になって考え抜いた理由である。思わず助けてしまった。

幸い、事は簡単に済む。

結末を言うと、アズラエルのプリチーなハートが爆発したせいで吹っ飛んだ白猿が向こうで伸びていた。加減はしたからたぶん大丈夫だろう。

軽い火傷程度はご愛嬌、白猿にとっても、あのまま幻影ヴァルキリーの魔剣に貫かれて共倒れするよりはプスプス焦げてた方がハッピーなはずだ。

実に久方にぶりに扱った細い剣を振り下ろすと、アズラエルは戯言を吐く。

「んー。アタシったらプロフェッショナル。アサシンも真つ青」

その肩からファンファンの返答。

「ハティちゃんに気を取られてる間に、背後からブスリとか、アズもワルよのう」

アズラエルは、彼女の《魔》の塊であるハート型バクダンでハティを吹っ飛ばした直後に、背後からヴァルキリーの偽者を、己の脇差で一突きしただけある。

それだけで、怪物の残像はいともあっさり、淡いヴァイオレットカラーの煙になって消失した。偽者の末路は意外と地味であった。アズラエルは独特の形状をした長剣を持ち替えると、それは手品のように消失した。艶やかに鼻を鳴らす。

「お上品と言つてほしいの。アタシほどの高見に至ると本物の半分程度の力しかないヴァルキリー相手にいちいち真つ向から戦うなんて馬鹿くさい。超くさい。いかに速やか、かつ合理的に仕事を片付けるか。上に立つ者が尊ぶべきは省エネの精神に他ならないの！」

幼い体つきをした一国一城の主が自前の帝王論を空っぽの大地に響かせていたところで、少年の声が上がった。この頃にはすっかり、魔剣やハートの爆発の余韻は過ぎ去っている。

「アズちゃん！」

あちら。

戦闘局地から少し離れた位置で、手に持つ弓矢を下方に垂らしていたのはシズネで、彼はとても驚いた顔を浮かべている。まあ、傍から見てわけのわからない爆発が収まった後に知人が立っているのだから、驚くのが当たり前だろう。

が。驚いたのも一瞬ですぐにシズネの表情は喜色を示した。

「うわあ、偶然だね」

「その常套句は（じょうとうく）ちょっとおかしいと思うの」

偶然でこんなアホな空間に揃いも揃ってたまるか。

少年のトンチンカンな笑顔にアズラエルは脱力したように撫で肩となる。なんて返そうかと考えてるうちに、少女は苦笑を浮かべて

いた。

「まあ、必然でも偶然でもいいけどね。久しぶりには違いないの」

少年の立ち位置からでは聞き取れなくても構わない程度の小さな声で少女は返す。

でも声は届いたらしい。シズネは笑顔でうなずくと、弓の形をしたアーティファクトを、アズラエルの剣と同じようにパシユウと消し去ってみせた。そののちにタタタと小走りしてきた。

シズネも小柄な男の子だが、それでも目の前に立たれるとアズラエルよりは高い。

やや上にある笑顔には、一寸前まで戦乙女に襲撃されていたことをすっかり忘れているかのようなものだった。笑顔の口が言う。

「久しぶり、かなあ。ついこないだ、ギルドの仕事で会ったじゃない」

「そうなの？」

魔王は首をかしげた。

ここ最近、アズラエルは魔国に戻っていたため、少年と会う機会などめつきり無くなっていたはずだが。シズネは屈託ない顔で言葉を続けている。

「うん。ほら、アミダに居た時、アデルちゃん連れて」

記憶を逆行して間もなく、ああ、とアズラエルは頷く。確かにそういうこともあったが、かなり前のことだ。



「あれを最近と呼ぶなんて短命な人間にしては見所があるの。それよりも、アンタの馬鹿な相棒、向こうで焦げてるわよ」

「え？ 焦げ？ て、おわあッ、ハチさあん！」

「やったのアズなんだけどね」

「証拠など無いの」

会話する魔王と従者の横手、報告された結果通りになってるハテイを目撃して、いくらシズネでも仰天していた。心配の度合いを感じさせる勢いで駆け寄っていく。

「ただ大丈夫ですか！ 生きてますかっ！」

「あー、うっ」

脳にダメージを与えそうなほど少年にガクガクと揺さぶられて、ノびた白猿の唸りはこちらまで聞こえてきた。何度も思うが、愉快な二人組である。

アズラエルは声をかけた。

「ひっぱたけば起きるわよ」

「はいっ！」

断定されたアドバイスを受けてシズネは素直に従っていた。往復ビンタとまでは言っていなかったのだが。

「ハチさあん！ 起きてえ！」

「いで。いたい」

必死な顔のシズネがバチーンベチーンと三往復くらい実行したところ、ハティは目を覚ましたようである。ガバッと身を起こして、

「いつてえ、俺は叩かれてるんだなッ！ このクソガキっ、何しやがるのかな！」

「ああ、良かった！ ハチさん元気みたいです」

猛る魔物のような形相をしたハティに胸倉を掴まれてシズネは泣いて喜んでいゝ。それにしても愉快。

白猿が起きたタイミングで、アズラエルはわざわざ「ゴホン」と大きな咳払いをする。

それを聞いて、恐喝現場のようになっていた人間コンビの注意が合わせて少女に向いた。

「まったく。つまらないくらい頑丈なサルなのね」

「ああ？」

言つと、巷の不良女にしか見えないハティの双眸が鋭く尖つていた。

構わず、魔王少女はのたまう。

「安心するといいわ下民。アタシという救世系魔法少女風無敵ヒロインが現れてすぐにアンタが手こずってたヴァルキリーモドキは撃退されたから危機は去ったと此処に宣言する。あ、別にアンタを助けたかったわけじゃなくて優しいアズちゃんはついつい判官ほうがんびいき臍へそ尻しりし

ちやうの。よわつちい者を助けるの。つまりそういうことなの。弱い自分に感謝なさい。だからって猿からのお礼なんて期待しちゃんいけど、まあ、もしもどうしても言うのであれば今なら期間限定でアタシの靴を舐めさせてあげてもいいの」

長々、ひたすら長々とした台詞にハティは途中から気の抜けた顔を浮かべて、無礼にもアズラエル閣下を指差すと、意見を求めるようにシズネへ顔を回す。  
そして言ったのだ。

「なあ、シズネ。誰だ？ あのうるさいチンチクリン」

「まさかの記憶喪失なの！？」

アズラエルは愕然とした。これはやりすぎたかと少し後悔してしまった。

シヨックを受けているアズラエルの目の先、白猿とくつつきあっていた少年も彼女の質問が存外であったのか、目を丸くする。

「ハチさん、忘れちゃったんですか？ アズちゃんだよ。ええと、アズ、アズ？ うん、アズちゃんだよ」

「綺麗な笑顔でごまかさないでシズネ！ 正式名称はアズラエルなの！」

「アズラエルだあ？」

とことん怪訝そうな表情を浮かべたハティは地面に腰を下ろしたまま、アズラエルの足元から頭の上までを順繰りに見回した。

「まるでどっかの魔王みてえな名前してやがんな」

アズラエルはグサツとした。

少女の肩で、ファンファンは鼻をフムフム鳴らしている。

「ハテイちゃん、ほんとにアズのことを記憶にないみたいね。でも、シズネちゃんのこととは記憶にあるとー？ 部分的な記憶障害かしらん」

ピクン、と。アズラエルは人間のものではない長い耳を動かした。ファンファンの台詞を聞いているうちに、さきほどシズネとの、「久しぶり、久しぶりじゃない」の会話が頭をよぎったのである。もしかしたら。

その可能性を発見した途端に、アズラエルの良心の呵責<sup>かじやく</sup>は収まっていた。

「ファンファン、ちょっと聞くけど」

「なあに？」

「ファンファンが此処に召喚される直前、何をしてたの？」

「ほえ？ アズと一緒に風呂入ってじゃない。こっち来たらアズ、服着てたけど」

「ああ、やっぱりなの」

アズラエルの方の記憶では、此処に来る直前はアデルたちと一緒に食事を取っていたはずなのである。最初に確認しておけばよかった。

精神世界であるのなら、そういう可能性もあることを念頭に置いてなかった。

「全員、やってきた時間軸が違うの」

「そりゃ、ビックリね」

おそらく、ハティはアズラエルのことを忘れてしまったのではなく、「まだ出会っていない」のだ。

異なる時間軸から此処に集まったのであれば、アズラエルにとっての「久しぶりの再会」が、シズネにとっては最近のことだという話とも辻褄が合う。

どこまでも異空間であるらしい。

「まあ、アタシの推理に揺らぎはないの」

「おい、そのチビ」

いつの間にか立ち上がっていたハティが、まったく粗野な表情でアズラエルたちを睨んでいた。

「さっきまでいた、騎士の女はどこいった」

冷静を取り戻したアズラエルは腕を組み、無礼な白猿に睥睨<sup>へいげい</sup>を返す。

「馬鹿め。言ったはずなの。このアタシの間然することなき一撃でみんなの思い出になりました」

「はあ？ ざけんじゃねえよ」

「結構結構。猿に理解してもらおうなんて思っちゃないの」

「んだと。誰がサルだクソチビ」

あつさり喧嘩調子になりだしたハティへ、傍に立つシズネが緩衝材ヨシのような笑顔を送る。

「ハラハラしましたけど、こうして無事だったんですし。今となつてはイイ思い出に」

「なるかボケ。ああくそつ、腕いてえ！」

どうにもハティが苛立っている原因は左腕からの出血であったようだ。患部となる二の腕よりも上の左肩を押さえ、アズラエルが見つめる先で痲癢かんしゃくを起こしていた。

シズネが今さら気づいたように、

「うわわ、血が出てますよ」

「知ってんよ」

「たく。ささくれ切れた程度の血で何をピーピーと」

アズラエルは呆れた口調で言い放つと、逡巡しゆんじゆんした後に二人の方へと歩み始めた。

ズザっと、警戒したようにハティが片脚を引く。

「あ、テメエ、近づくんじゃねえよ」

「有料で治してあげてもいいの。その程度の治癒なら扱えるから」  
そう提案する。

魔国の主君、魔王の身分、まったく金など必要としないアズラエルだが、無償でなんでもしてやるのも癪なので有料設定にした。  
しかしハティは信用してない顔付きで、

「要ら」

しかししかし謝絶する前にシズネが口を挟んでいた。

「アズちゃん、お願い！」

「お願いされちゃあ、断れないわね」

「ちょっと待てよ、おい。あの騎士女といい。なんでシズネはさつきから俺の知らない連中を知ってたんだ」

時間軸上、一人《遅れている》と思われるハティは、既に知り合っているシズネとアズラエルの様子を面白くなさそうに見つめてくる。アズラエルはそんな彼女に蔑視へっしの目を向けて、努めてクールに言葉を返した。

「馬鹿に理解させる労力を払う気はなし」

ギリリ、と相手の歯がきしむ。

「テメエ、さつきから人を猿とか馬鹿とか」

「腕、さつきと出せての」

路地裏の暴漢どもを束でシバキ倒す喧嘩女だろつとも、魔王であるアズラエルが恐れはしない。これ以上ギャアギャア喚こつものなら、コイツらを早々に放逐ほうちくして何処か無目的に飛び立とうかと思いはじめた時になり、ようやくハティは舌打ちを挟んで出血中の左腕を少女に差し向けてきたのだ。

「変なことしたら承知しねえぞ」

「素直じゃない奴なの」

「人のこと言えないと思うけどなあ」

「耳元でムカつくこと言わないでファンファン」

アズラエルは決して認めようとはしない。

誰にも心を読ませはしないが、認めない。

犯人が誰なのか、憶測はできる確証は無い紫色の世界。 天気がいと悪しき魔国よりもずっと見応えが無い虚構の空間。

ファンファンは居ても、友人アデルは傍にいない。

笑いを響かせようとわずかに感じた寂寞せきぼく。

アズラエルは、この、誰かが創った寂しい景色が続く大地に「久しぶりの顔」を見つけてしまった時、ちよろつとだけ、浮き上がってきた気持ちに絶対に認めようとはしなかった。

耳元の従者にムカつくことを言われた以降は、魔王は少し不機嫌になってしまい、ぷうつと頬に空気を溜め込んだあと、吐き出してそれから簡単な治癒の呪文を唱え始めた。

この少女は、ついつい、知り合いに声をかけてしまっただけである。



G  
o  
t  
o  
N  
E  
X  
T  
.  
.

記憶を探る行為に、あまり興味は無いが、思い出すと、旅先で、立ち寄った街に、ハティが「クソうめえ」と、絶賛ぜっさんし熱弁ねっぺんした、大衆食堂があると聞いたので、ならば連れて行くべきだと、ハティに視線で訴えたところ、理解してくれたので、シズネやハルシオラも一緒に、皆で、その店に行ったのだ。

なるほど。

そういう経緯いきさつで、彼女がハティに連れて来られた場所は紫色の物寂しい空間であった。とにかく広い。見上げれば空のように高い天井。変な紫。そして洞窟の鍾乳石のように歪な硝子細工が点々と店内に突き立っている。

なかなか変わった内装の食堂だと思った。まあ、料理の方がなかなか旨ければそれでヨシと思い、注文の方は案内してきたハティに任せようと、店の入り口へ彼女は振り返る。

顔を向けると首をかしげた。

「みんなはどこ」

誰もいなくなっている。入り口もなくなっている。

それから三十分間ほど、振り返った姿勢のまま、ハティたちが現

れないかと広大な一方角を見守っていた彼女は、どうにも仲間たちが来ないことを理解すると、仕方ないので店内を進むことにした。テーブルも椅子も無い。メニュー表も落ちていない。不親切な食堂だった。

「……………」

ただ、しばらくすると大きな体の店員が現れた。

この店では、店員に仮装を義務付けているのかもしれない。

店員は、まるで物語に出てくるオークのような外見をしていたのだ。

メニュー表も無いのでしかたなく、彼女は店員に告げた。

「料理は、なんでもいい。ウマイものを」

客の抽象的な注文が腹に据えかねたのだろうか。悪鬼のような店員が太い腕を振り上げて、攻撃をしかけてきた。

「何をする」

なんでもいい がいけなかったのかもしれない。格式高くプライドのある料理店であったのかもしれない。

彼女は店員の攻撃を鮮やかに避けた後に、注文のしかたを変えた。

「今が旬の、そう、シェフのお勧めを」

駄目だ。

店員はカンカンだ。なおも攻撃をしかけてきた。

やがては何処からともなく、店中から総員をかき集めたように、オークの仮装をした店員が群がり始めてくる。よってたかつて、せ

つかく足を運んだ客を締め出そうと襲いかかってきた。

そろそろ、彼女にも怒りが芽生えた。

ハティのお勧めだと言うので期待してきてみたが、まったく態度の悪い店員どもである。

彼女は手に何かを持っていた。布袋に包まれた長い棒状の何かである。

不条理にも激昂している店員の群れは、低脳な動きで来店客に危害を加えようと突進してくるが、緩慢な口調のわりに身軽な彼女は危なげなく巨漢の影を掻い潜った。

そして至近距離でないと聞き取れなさそうな、小さい声で店員に告げる。

「問題ない。諦める」

ここでの食事は諦めた。注文しようとも奴らが差し出してくるのは料理でなく悪意の腕ばかり。

彼女を案内したハティは来るまでずっと、笑顔を浮かべていた。

誰にもわかることではないが、ひよっとしたら彼女は、ワクワクしていたのかもしれない。

今は少しだけ、怒っていた。

「……………」

彼女の持ち物の、布が取り払われる。

カシャンと音を上げた後には、棒状だったシルエットがずっと大きい物になっていた。それは彼女の身の丈ほどもある大鎌。いわゆるデスサイズである。

真紅の装束。赤く、ツバの広い三角帽で素顔を隠す彼女は、同業者たちから度々「紅の死神」と呼ばれている存在。

実力ならば、ギルド最上位とも目される天性のハンター。

シデンの鎌はとにかく巨大だった。

ドゥンッ

旋風せんふうと轟音ごうおん。

鉄色が一閃されたかと思うと、並居る従業員たちはコミカルとも言える勢いで吹っ飛んでいく。巨体がバタバタと地に落ちた。

一撃。

それであっさり、静かになってしまふ。

彼女のデスサイズが放つたのは斬撃と言うよりも、それ以上に広範囲の衝撃が走り、シデンの傍で動く者はなくなっていた。うるさいから蹴散らしただけである。

この店で食事を取る気もとうに失せて、もう退去しようと思ったシデンだが、

「……………」

少し思案する。

店員が怒り狂ったのは、こちらの態度にも不備があつたからだろう。シデンはそういう部分に疎いから、知らず知らずのうちにこの店の逆鱗に触れてしまった可能性がある。

反撃したことに謝罪するつもりはないが、何かしら一言は添えておいた方がいいだろう。普段、ハティたちからも学ばされるが、人とのコミュニケーションは重要なのだ。

自分が知っているフレーズをいろいろと探し、やがて《正しそうな言葉》が見つかり、彼女は倒れ伏した店員たちに伝えた。

まったく抑揚の無い声で。

「ベイバー、釣りは取っときな」

彼女は出口を探すために歩き始める。

他方、猫娘の声が木霊した。

「にゃあああああああ！」

悲鳴ならどの音を取っても大差ないだろう。とりあえず猫なのでニヤアアアアにしておく。

ともかく。何せ、メンタルが脆もろすぎるため、モンスターの一匹とでも一人で遭遇すれば激しく狼狽する、気弱な猫の獣人である。

獣人と言っても、その顔立ちはほぼ人間。年齢は十代前半である可愛らしい少女の金髪で隠された頭部からは、大きな猫の耳が垂れていた。

そして、そんな猫娘は非常に臆病な性分をしていて、怖い怖い蛇女に大軍で来られたら泣き喚くに決まっている。

「おほほほほお！」とか、妖しく哄笑しながら蛇の身体をくねらせて……軽く100体？ おまけに全員が一卵性で生まれてきたのかと言いたくなるほど同じ女性の顔の蛇であるため、ともかくにも恐ろしい。死ぬっ。恐怖だけで死ぬるっ。

と、そんなわけで滝のように涙を流す一匹の猫と、そして、もう

一人の青年が一緒に逃げていた。  
青年の表情は猫娘とは違い、朗らかに笑っている。

「これはイイ感じにスリリングですねえ。ここなちゃん、もしもこんな状況で転んでしまったら、いったいどうなると思います？ 貴方は転ぶのが大得意でしょう」

「いいいやあああああッ！」

「はは、その顔その顔」

危機感があるのか無いのか判断しづらい光景だった。

両者の雰囲気は対称的すぎる。

爽やかに笑っている黒服の青年は、ツレである猫娘　ここなのペースを見ながら併走していた。彼の様子からは明らかな余裕が感じられ、きつと、その気になって脚力を上げればここなを置き去りにして一人逃げ切れるのだろうか、しかし、そうせずに隣でヒィヒィ声を上げている少女の傍を走り続けるのは優しさなのか、はてさて、わからない。見る者によっては青年　ハルシオラの顔が、すごぶる楽しそうだと、そういう感想を抱くかもしれない。

少し後方からは、延々とした奇声。

胡乱な蛇女の軍勢は、蛇らしい執念深さで、どうにか追いつかれずにいる二人組をなかなか見限ろうとはしてくれなかった。

そして、暑苦しい黒服で走っていても清涼感たっぷりの表情をしているハルシオラは、定期的にここなへ声をかけている。

「ここなちゃん、まだ走れそうですか？」

「ハ、ハ、ハあ……」

そろそろ少女の声もほつれつつあった。

「大丈夫ですか？ 余裕なさそうなので僕が確認した上での報告をすると、先ほどから差を詰められつつありますね。連中の、盛りがついた犬のようにギラギラと血走った眼が徐々に迫ってきています。もしも追いつかれたら、あの、又メ又メと油の光る鱗に覆われた身体が大量に絡みついてきて、それはさぞかし不快な感触なのでしょう」

「ハ……、ん……」

「ん？ いま、僕のことを呼びましたか。もう一度お願いします」

身の軽い猫の獣人とは言え、ここなはまだまだ幼く、優男でも背が高いハルシオラとの体力差にはかなりの開きがあった。結構な距離を逃げ続けたのだから、たった今の少女の声からは（実際には少女の《強い思い込み》によるものだが）体力の限界を予告させるものになっていた。

ハルシオラは聞き返し、走行中に隣へ平素な笑顔を向けると、垂れた猫の耳を生やした頭がヘトヘトの動きで持ち上がる。

汗ばみ、上気した顔。瞼を下げた瞳が、救いを求めるように青年のを見上げ、喉を絞るように喘いできた。

「ハア、ハ……ハル、さあ、ん……、どうにか、して、くだ……」

「たまりませんね」

ハルシオラは神と対談するように天空を仰ぐ。

逃亡中とて、もう、これでもかってほどにユトリのある動作で広がる紫色へ腕をかざし、その声は、戯曲の一節を演じるかのような



口調なのである。

「惜しむらくは今、ナビゲーターが手元に無いこと。それさえあれば、即刻、音声を保存しているところですよ。いいえ、録画がベストでしょう。その汗、その表情。そんな切ない声で名前を囁いてもらえた今日の僕の運勢はいかほどなのか。神は本日もイイ仕事をしているようですね。グッジョブ、マイゴッド」

一方で、この世の不幸を一身に背負い込んだ風な顔をしているこなは、隣で幸せを噛み締めている青年の独り言が聞こえていないように、ギリギリの台詞を続けていた。

「死ん、じゃう……。もう、走れ……。な」

余裕のある男はちゃんとそれも聞き取ったらしい。なにせ、録画を所望するほどの少女の喘ぎ声なのだ。聞き逃すはずもなかった。不誠実な笑顔で、

「確かに、埒が明かない。僕としては充分に楽しめましたし、そろそろなんとかしましょうか」

不謹慎なことを言うてから、ようやく打開策を考える気になったよう、ハルシオラは走りゆく前方の景色をざっと見回す。

現実感と離別した瞬間の記憶はない。  
気が付けば硝子の大地であった。

夢見心地。無機質のだけが連なる物寂しい空間に、自分たちと大量の蛇女を除いて、形を持つのは地面から突き立った硝子のオブジエだけだ。シルエットは様々で、高い物もあれば低い物もある。

「ふむ」

いくつか建っている硝子の自然物を一望し、ハルシオラは早速、案を閃いたらしい。

「ここなちゃん、こちらへ」

「は、ふ」

唐突に、彼は少女の手を掴むと進行方向を右斜め45度あたりに修正した。この頃になると、ここなの表情はもはや意識の有無も疑わしいものになっており、ハルシオラに手を引かれるがまま、惰性で足を動かしているように見える。

女の声で高笑いする蛇たちも斜めに向かい始めた二人を、しっかりと追ってくるようだ。のたうち、中には跳ねる蛇もいる。そうして何十とある同じ女の顔が、ここにきてペースの落ちた青年と少女との距離を縮めていく。

ここなを先導するハルシオラが目指しているのは、景色の中でもひとときわ背が高い硝子の塔であるらしい。誰が様子を見ても、彼の狙いがそこに昇って蛇から逃れることだと、想像に容易いであろう。実際に、その通りであった。

ただ、彼のことをよく知らない人間であれば、彼がとても手際良く高台へ登るのを見て驚いたかもしれない。

世界には、《魔》と呼ばれるものがある。

知らないと恥ずかしい事柄なので、説明は割愛させてもらう。常識をいちいち毎回毎回教え諭してもらえるほど世の中は甘くないことを知ってもらいたい。

ともかく。

「よくがんばりましたね。もう安心ですよ」

樹齡千年もある大木のようにたくましい硝子のオブジェの高い位置、ちょうど腰をかけるのにちょうど良さそうな出っ張りへと瞬間に昇りきってみせたハルシオラが安全を伝えると、ここなは、猫だけに猫のように鳴いた。

「……にゃあ……うぶ。もう、駄目え……」

極度に疲弊した獣人の娘は身体を置けるスペースで、猫らしく丸まって横たわる。

「ええ、もうゆっくりとそこでハアハアしててください」

一気に大地から離れて、高い景色。満悦の滲む微笑を浮かべる黒服の青年は下方へ足を垂らしたのだった。

彼の《魔》は細く、長い、糸のような形状を取る。

幾重にも発生し、その動きは変幻自在。

そして、人を二人、軽く持ち上げるのに十分な強度を備えていたのである。

かくて、女性的であるため逆に気味が悪い大蛇の大群が蠢く、地面からの逃亡に成功した青年と少女。一転して静かな状況になった。特に、動かなくなってしまった猫が混ざる女の子について、《至極ハルシオラっぽい見地》で注目すると、とにかく扇情的で、ワンピースの形をした旅装束はスカートの部分の丈が短いのに、気にする体力も残ってないのか、激しい運動により火照った太ももを倒し、寝そべって息を整えている。

「ふう……ふう……」と儂い吐息。

そういう体勢であるため、ここなは相当な隙だらけ。下着の方も包み隠さず、と言ったところだが。

しかし、どうやらハルシオラは見るつもりが無いらしい。

ここながヤアらしく倒れこんでから、彼はわざわざ、パンツ（硬派な文にしたいため訂正する）尻尾を生やす腰の方とは逆側、頭部の方へと移動して腰を下ろしたのである。さきほどから、少女に対して不純な興奮を抱いていると他人に取られたとて不思議のない語録を連発していたのに、それは意外に思える行動であった。と、言ってしまうえば失礼か、今の青年の表情は限界まで己を酷使した少女を労うように優しげであるのは確かだ。まあ、限界になるまで何もしてあげなかったのも彼本人であるが。

「奇妙なことになりましたね」

遅まきながら、独り言で事態について言及した。

見慣れぬ風景。最たる問題は、原因がわからず、いかにしてこの状況を解決し、見慣れた風景に帰ることができるのか、その解決案にまったく心当たりがないことであった。適当にあたりを散策していればそのうち何かが見つかるかもしれないが、しかし、下には蛇女のように、変な連中がウロついているのである。迂闊には歩きづらい。

ただ、東西南北も定まらないひどく曖昧な青紅色の空に、ハルシオラは嫌悪感を持った様子もなかった。笑みを浮かべて高い所を静かに過ごしているのだ。先ほどから言動が奇矯な青年であるし、或いは紫色が好きだという可能性もあるが、それにしても達観とした居住まいを見せるものだ。

すぐ隣でヘタばっている猫耳少女とはかなりの違いである。

少しして、ここなもようやく息が落ち着いてきたようだ。

「もう、何が、なんだか……」

泣く泣くといった声。細い両手に力をこめ、ヨレヨレと身体を起こしている。

仲間のその動作に、ハルシオラは暖かくも飄逸ひょういつとした微笑を向けた。彼の、まるで考えを読み取らせない瞳が、すうっと細くなり、回復したての少女へ告げる。

「あながち、僕の夢の中かもしれませぬね」

「ふ、なう？」

ここなの瞳も細かった。しかし、こちらは体力低下により瞼が垂れただけの、どうにも間の抜けた表情で、ハルシオラの独白が上手く聞き取れなかったように頭を前傾させた。

「夢って、いきなり、なんですかニヤ」

ハルシオラは熟練した結婚詐欺師のように洒脱な動作で首を回しつつ、笑んだ視線をここなへ流した。

「いえ。思い返してみると、前に、そう言えば、ここなちゃんと蛇は《相性が良さそう》だと愚考した時がありましたね。この景色は僕の素朴な願望が作りあげた虚構空間なのではないかと」

「？ ……？？」

彼女はさしずめ「キョトン」とした顔を浮かべ、すぐ、あどけなく首を振った。

「夢……とは、なんか違いますニヤ。夢の中で、あんな疲れませんニヤ」

今は引いたが、実際にあの瞬間のここなは汗が光っていた。ハルシオラは頷く。

「なるほど。しかし、僕はあの距離を走ったわりに、驚くほど疲れしていませんよ。ここはなんだか現実味に乏しい。まあ、夢とも少し違いますか。そして、夢よりも現実の方が価値のあるものです。先ほどの、ここなちゃんの、ハルさ……あんアハアンは、夢ではない事実として永久に僕の胸に刻みつけておくことにしましょう」

満足そうに言う彼に、ここなは顔を赤らめて、俯いて、

「そんな……ボク、アハアンなんて言っていないニヤ」

「良い思い出は誇張こぶちやうした方が楽しくありませんか」

「……何処なんですかあ……」

予兆も無く、ここなは泣き出してしまふ。

脆弱な涙腺くせうせんの持ち主であるせいか、流す涙は景気の良い大粒である。ポロポロとこぼれ始めた。

「ハチさんもシズネくんも……シデンさんもベルエさんも、いない……ボク、こんな所でひとりぼっちだニヤんて」

それはヒドイ。情緒不安定になっているらしく、何気なく事実とは異なることを言いながら嘆いている。会話中に存在を度外視され

たハルシオラは、それでも気分を害した素振りを見せず、憂鬱な猫娘を穏やかに見つめていた。

やがて彼は苦笑を浮かべて、頬をかく。飄々としていても、今一瞬の挙動は好青年に見えた。

「きつと元に戻れますよ。みんなにも、また会えます」

「う、う、う……」

余談になるが、実はこの二人、普段から会話をすることがあまりないのだ。ここなにとって彼の印象が薄いのも、それが理由である。仲が悪い、ということではなく、もともとハルシオラは他人の会話を見守る癖があるため、先ほど少女が名前を哀願した仲間たちが揃っている「日常の中」でのハルシオラは、そもそも寡黙な人間なのである。

しかし、今は、二人きり。

もしかすると、彼が饒舌になっているのは、不安に駆られたここなに対する気遣いなのかもしれない。ただ、そうだとしても、口を開けば何かと不埒である彼なので、なかなかその人徳が見えてこないが残念である。

「少し落ち着いたら、このあとのどうするかゆっくり考えましょう。なに、心配はいらない。原因の無い事象など存在しません。原因がある以上、探せば見つかります」

少女が泣き始めてからの彼の声は少し真摯な響きをしていた。ようやく、ここなが赤くなった目をあげる。

ハルシオラはニコっとして、

「ハチさんたちも、きつとここなちゃんのことを探してますよ。そ

のうち助けにきてくれるかもしれません」

ここなは、耳が猫の形をしていて、同時に鼻も猫のように黒ずんでいた。チャームポイントである。そこをグズリと鳴らしたあと、少しだけ笑う。

「ハチさんは、そんなに優しくくないですよ」

「わかってませんねえ。ツンツンしていても、彼女はここなちゃんのこと大好きなんです。おっと、本人には内緒ですよ？ 怒られてしまいます」

秘密を意味するジェスチャー、唇に指を当てた彼に、女の子はもう少しだけ大きく笑った。

「そんなこと伝えたら、ボクが真っ先にぶたれちゃう」

「照れ隠しです」

そろそろ、ここなは本来持つ《根拠の無い明るさ》を若干取り戻してきたように見える。少し前に無意識に仲間外れとしてしまったお兄さんへ、まだ控えめだが、子どもらしい笑い声を返している。

「ナビゲーターがあればニヤ、録音してたのに」

「はは、言いますね」

良い傾向です……と声もなく唇で続けたあと、ハルシオラは笑い話に節目を付けるように顎を落とした。

その軽薄な笑顔が、少し真剣の色を宿したように見える。黙して



いる限りはかなりの美青年に違いなかった。

「さて、ここなちゃん」

端正たんせいながら一般的であるハルシオラの表情に、ここなは素直に返事をした。

「はいニヤ？」

「さきほど安心、と貴方に伝えましたが、アレは嘘です」

「へ？」

「実は、蛇女が昇ってきているんです」

「へえ？」

少女は意味を理解したのちに再び絶叫を上げることになった。彼らが身を据える硝子の塔が砕けるかってほどの甲高い悲鳴なのである。ハルシオラは両手で鼓膜を保護しながらも、剣呑ではないニコニコ顔を浮かべ、仲間の叫喚きょうかんが収まった頃に、下界を覗き見して、こう伝えている。

「器用なものです。腹部に吸盤でもあるんでしょうかね」

ずっと聞こえてきていた「オホホホオ！」という群れた鳴き声は、実は、徐々に昇ってきていたのだ。

決して速くはない。しかし、下を見れば無数の女の顔が硝子の壁に張り付いて、よじよじと登ってくるわけで、特に心臓の強度に自信が無い者にはお勧めの出来ない光景になっていた。例を挙げれば

ここなが筆頭である。

猫耳を萎れさせる少女は、高台のスペース、断崖とは逆側の壁に背中を密着させて大いに震えていた。

「に、にに、逃げ場なんて無いですニヤッ」

またしてもスカートを配慮しないポーズであったため、ハルシオラは横に視線を外しつつ、ニヒルではない笑いを漏らす。

「ふふ、なあんてね。と二転三転させ　ご安心を」

青年は黒一色の服に包んだ体を、ふしだらな空の下で起立させた。

「平地での大群ほど怖いものはありませんが」

シュルリ　と、彼の袖口から不可視の音が上がり、

「戦術上、高い地点の者が圧倒的に有利。現況は無難、というやつです」

呟いた。とても小さな声だ。硬派で頼もしい発言であったのに、青年は少女まで届かぬほど無音に近い声で、自信の根拠を述べると、その周辺の空気が不思議にきらめく。

糸だ。

クイツと手首を返す動きのあと、悪戯を済ませたような微笑で、さらに呟いた。

「鼠返<sup>ねずまがへ</sup>しならぬ、へび返しといったところでしょうか」

台詞の直後。

下で響く女の笑い声が、同時にいくつもの悲鳴に変わる。

カメラを動かす。巨大な硝子のオブジェをよじ昇る蛇女たちは、一定の高さまで達すると、例外なく、見えない糸で顔を切らすと悲鳴を発し、落下していくのだった。

「蜘蛛の糸が、奈落を昇るためのものだとはいりませんから」

やがて、蛇の奇声はぷつりと途絶えてしまった。

ドーナツ状に設置された、カミソリほども鋭利な糸は、硝子の塔を昇る蛇女たちを虐げる。

「そして、さらに、そこでここなちゃんがズドン。です」

「……ボクも、気味の悪いモンスターだと思ってたけど、これではさすがにあんまりですニャ」

小さな顔で言いつつ、ハルシオラの実況通りやってのけたここなは、術式という形で《魔》を扱う者、表せば魔法使いである。

ハルシオラのサディステイックな方法により地表へ落下していった蛇女たちへ、ここなの召喚した巨大な岩盤が上から降ってかかったのだ。なかなかにしてムゴたらしい連携であった。

連携を暗に指示したハルシオラは、成敗した蛇たちへ特に祈禱きとうをする顔でもなく、ただ春風のように微笑んで肩を小さく揺らす。

「いつまでも、この場所に留まるわけにもいきませんからね」

高いところ、隣に佇む少女は淡いブロンドの髪を、かし、と傾けて、つぶらな双眸を彼に上げた。

「どつするんですかニヤ？」

謎多き黒服青年の居住まいはとにかく天衣無縫だ。ゆえに、その言動は行動的な時に得も知れぬ説得力を携えているのかもしれない。

「言ったでしょう。原因が存在するはずです。探しましょう」

「でも、下にはモンスターがいつぱいだし……」

弱音を吐くケツトシー。そこでキツと、ハルシオラは真面目な顔を作った。文句の無い真剣な表情である。

それは美貌と気品を兼備した高貴な顔　ここなの表情も強張るほどだったが。

「恐れているのは物事が解決しません。及ばずながら、僕が貴女をお守りしましょう姫様。ふふう、ふ」

口に手を当ててしまう。

「なんで最後、笑ったかニヤア……」

言葉の尻の方であっさり真面目な顔を瓦解がかいさせてしまった青年は、くつく、と不審な笑い顔を明後日の方に向けて、そんな彼にここなは呆れ返った。

静かに笑い続けるハルシオラは、震えがちな声で、

「いえ、失礼しました。シチュエーションとしてアリな台詞かと思  
い試してみました……思った以上にナイですね。堪えられません  
いえ、ここなちゃんも可憐な女性だと思いますが、僕の方はまっ  
くガラではない。まあ、危ない者が現れた時は、まただしがなく  
逃げることにしましょう。その方が、らしい、ですからね」

健やかに笑んできた青年に、ここなは顕著に肩を落としてしまう。  
俯き加減の視線から、覗き見るのように異質の空を仰いだ。

ここなは小心者であるため、この先からはずっとハルシオラの後  
をついて歩くことになるだろう。だから、ハルシオラが動く素振り  
を見せるまで、少女は空を眺めたのだ。

途中で、言うほどでもないことを呟いた。

「この空、嫌いですニヤ」

「僕もですよ」

下で立っていて、息苦しい。  
人を不安にさせる色。

「……あれ？」

ここなの目つきが変わった。次のように考えたからだ。  
不安の色　誰かの不安を塗り込めたように広がる空、と大地  
不安にさせる色ではなく　「不安の色」？  
それなら。

誰の不安ですか？

他愛ないことだ。暇つぶし、余興　或いは現実逃避でもいい。  
意味の無いことに、ここなは想像を巡らせたのだ。

ここなの目つきが変わった。ほんの少しだけ。

その瞳は強くなった……かは、きつと誰にも断定できないことだが、これならば自信を持って言えるだろう。柔らかくなった。彼女の方が不安を瞳から、少しだけ、引いた。

代わりに宿ったのは　親しみ。と、似ている。

まるで、自分を哀れむことは止めて、空に対して同情を始めたかのように。あと少しだけ、獣人の女の子は空を眺めていた。

もはや幼少時から養<sup>やしな</sup>ってきた反射神経であったのか。忍の娘には、何か心が乱れた瞬間、真っ先にそれを口走ってしまう癖がある。

今回は、歩いている時、唐突に発せられた。

「あーにーじゃああああつー!!」

喜んだ時も、悲しんだ時も。特に意味がない時でも、少女はそう叫ぶ。

伝えたいことがあれば、真っ先に彼へ伝える。特に兄者である必要がない時も構わず、もっぱらリアンが呼びつけるのはウィルフレッドであったのだ。アニジャー！　の使い勝手の良さときたら、TPOの制限は一切存在せず食卓でもアニジャーの一言で塩にも胡椒<sup>こしょう</sup>にも意味を代行できるまさに万能のフレーズだった。

そして、たった今のアニジャーは、さしずめ「警戒」を意味して

した。

ゆえに、兄者ことウィルフレッドの対応も素早い。リアンの声を聞いた瞬間には立ち止まり、腰を落とし、全身に警戒の空気を走らせながら、

「今度はなんだ。どっちだ？」

ウィルフレッドがリアンへ尋ねた頃に、残る二人、ピアドラと謎の青年アッシュヘアもそれぞれ立ち止まる。先頭で暗黙の合意を交わしている義兄妹に、続いてアッシュヘアは精悍さのない声でたずねた。

「リアンちゃんは、いつてえどうしたんで」

白髪青年のすぐ後ろを歩いていたピアドラが、特に感情性も無い声色で即答していた。

「危険なんじゃろ」

「危険？ てえと」

「健忘か、おぬし。もうスライムの感触も忘れたんかいな」

冷淡な声。

青年は白髪をワシワシと掻き、振り返る。

「ええつと」

なにかと反応の悪いアッシュヘアーが、首を後ろに向けた頃に、あのピアドラでもさすがにイラついた顔を浮かべていた。寝袋少女は舌打ちを挟んだあと、彼に対する事情説明を放棄した。

「うざい。面倒な男じゃのう。黙って死んどれよ」

ピアドラの言下、そこでリアンが叫ぶ。

「まっすぐ 飛んでくるよ！」

警告。警戒。気を引き締めよ。  
直後は、ウィルフレッドの声。

「伏せろっ！」

「へい？」

「……愚図が」

ピアドラがまたも、舌打ちを一つ。

ウィルフレッドの忠告に反して、ピアドラは軽く跳ねた。アダ名が寝袋らしからぬ運動で、傍でポーンと立っていた白髪をガシッと掴むと、その持ち主である青年の頭部を背の低い少女が地面へ引きずり倒したのだ。

そうされると、アッシュヘアーは呻く。

「いだあ、ぶ！」

ことのほか乱暴な方法で、また強い力で青年を強制的に伏せさせ



たピアドラは、自らも体勢を屈めつつ、その癩しやくに障さやつたような声を、突っ伏した彼の耳元で囁く。

「いいか、聞け、ぼけ。唐変木とうへんぼく。二度とこんなことはせんからな。アタシって優しいのう。どれだけ優しいか、一度だけだから事を知ったあとに有難く味わあよ？ ぼけが」

そして風が通り過ぎていった。

ただ風、と一言では物足りない。暴風、突風である。伏せていなければ、上半身が失われた可能性もある。凄まじいものだった。

通過と共に伏せていた全員の衣類を、連れ去りそうなほどに勢いの強い風圧が発生し、地面へ貼り付けたアッシュヘアの、腰元に組みつく格好で身を低くしてたピアドラは飛んできたそれをチラリと見た。

ソイツを見て、少女はようやく愉快そうに目を細くする。

「恋しいのう。《顔見知り》じゃ」

浮世に疎いピアドラでも、ソイツはよく知っている魔物だったのだ。

メルヘンな連中に襲われることが多かった今までに比べ、先ほど地表の砂塵を一掃するように低空を飛んできた奴は、現実界にも存在する種族である。

空飛ぶ怪魚と言えば簡単か。

細く長い頭と、青光りをする鱗を持った巨大な魚、のような輩である。

魔物として、専門性の低い本にも載っている程度には有名だ。もっぱら、ギルドが指定する魔物の危険性にはアルファベットが用いられるが、ソイツに与えられている文字は「B」。一般冒険者からすれば充分な難敵だと分類されるだろう。最大の理由は、その飛行

速度。鋭利な頭部での突進攻撃は、破壊力、そして防御困難という観点ではひたすらに厄介であったのだ。

実際、奴が通過していったあと、立ち上がったウィルフレッドの声もだいたい辟易としている。

「ランカかよ……こんなところに。実際に見たのは初めてだ」

空飛ぶ槍。どちらかと言えば槍魚の名で知られている。

出現は南海で多く、冒険者の敵と言うよりも船乗りの敵と言った方が正しい。大型船の横つ腹を貫通したなど、迷惑な被害報告の多い魔物である。希少というわけではないが、内陸を歩いている限りは出遭う機会が少ないのは確か。

最初の突進後、槍魚は地平線の近くまで飛んでいき、浮かぶ巨大な魚影を旋回させていた。こちらへ戻ってくる気概に溢れているらしい。

少し前まで、白髪青年のトロさに同属嫌悪けいかくなんかの圭角を見せていたピアドラであったが、遠くの槍魚を見て、あこぎな笑みを歪ませる。普段の飄々（ひょうひょう）とした表情ではなく、わずかな攻撃性を持った瞳がクツクツと揺らいだ。

「ようやっと、マトモに食べそうな奴じゃのう。存外珍味と聞くぞ」

不真面目な声に、ウィルフレッドは大して気乗りもしてない顔で口を開く。

「ああ、それもいいかもな。逃げようにも、ランカじゃ速すぎら」

襲ってくるのなら、迎撃以外の選択も無さそうだ。振り返ちにした後は焼き魚にするのも良いだろう。

最も低い位置から、未だ平伏していたアッシュヘアの声。

「バババ、バケモンですかいつ」

特に武力も無さそうな青年にとって、モンスターはとにかく恐ろしい存在なのだろう。ウィルフレッドが忠告している。

「アンタ、下手に動くなよ。手足が無くなるぞ」

ひい、と青年からは引きつった吐息が漏れる。

ピアドラがコロコロ笑った。

「無くなっても困らんじやろう。鈍いもの、コイツ」

続けて寝袋少女の顔には不機嫌が返り咲いていた。

「なんじゃあ、レッド。その目わよ」

不機嫌の理由は、ウィルフレッドが物珍しそうに視線を細めていたからである。

呆れたような顔のウィルフレッドは口を開いたが、しかし、返答する時間はもう残っていなかった。

リアンが再びアニジャと叫ぶ。

破砕音。向こうの景色に聳えていた硝子の塔が砕けて散る。空気抵抗とは仲良しの硬い硬いトビウオが、ちょうど直進してくる頃合になっていた。のんびり見てもお腹にプスリと突き刺さる速度である。

ウィルフレッドはのんびりでない、引き締まった顔を浮かべると、動いた。

「リアンはアッシュヘアを」

大して張りの無い声で呟きながら飛ぶ。獣が混ざる身体は、凡庸な人間よりもずっと軽やかに跳ぶものだ。  
リアンが答えている。

「オーキードーキー。アニジャ！ 三十六計どうするヨ！」

小柄な少女の台詞のあとに二度目の暴風は到来した。音速とはいくまい。しかし、ひ弱に直立する者ならば容易く吹き飛ばされるほどの風圧を伴う、魚類型飛行モンスターの突進なのである。

どうなったのかと言えば、二度目もやり過ぎす形となった。

リアンは兄貴分の意思を汲み取ったようで、暴風が来る前には機敏な動きで地面に臥している青年を抱えて危険地帯候補を飛び退いた。少女が成人男性を抱えて飛んだのだ。飛ぶ魚に次いでシュールな光景。

シュールは続く。

子どもの形をしたピアドラが、敵襲に対して、まるで動く気配を見せなかったのだ。反応できなかったわけでもない。その証拠に、槍魚が尖る頭で迫ってきた直前、呑気にこんなことを呟いていた。

「おうおう、速いのう」

と。

ビ ジャリ。

水音。

それが血液だと思えば、ずいぶん惨憺とした音に聞こえただろう。生々しく体内の液体が跳ねる音は、暴風の中に響く。

高速の低空飛行で突進してきた槍のような魚は、逃げることをしなかった少女の半身を あるがままに貫いた。物理抵抗など一切感じぬほど滑らかに抉れた。だから水の音がした。

しかし、それは血液の音ではなく、少女は槍魚の通過後に……何もかも平然としていて……後方へ振り返るとニヤアと唇を歪めて咳いている。

「間近で見りゃあ、愛嬌ある顔しとるの」

彼女の身体は一度決り取られたはずなのに、元のままだった。崩れても戻る。再生。不死身。暴力を受け付けない体質。

ピアドラはウィルフレッドから「お荷物」と呼ばれているが、それは足手まといという意味の荷物ではなく、もつと単純に、移動中、寝袋としてウィルフレッドに運ばれることを意味しての荷物なのである。

モンスターと戦う時は、良くも悪くも「影響がない」。

加勢する気もなければ、自らの身を守ることもしない。モンスターとの戦いが起こっても、悪質な幽霊のようにニヤニヤと棒立ちするだけ。

だから、ウィルフレッドやリアンからしても、こういう場面でありピアドラのことを意識する必要がなかった　いや。

「ドラちゃん！　痛くない力！」

宙を跳んで、魚を避けて、地へ着いたリアンが一度碎けてしまったピアドラを仰々しく凝視して叫んでいた。驚くあまりか、肩に担いでいたアッシュヘアを下ろす動作も乱暴、ポイって感じた。

リアンは比較的に心配する。ピアドラが頭を失ったり上半身と下半身が真つ二つになったりすると、いちいち律儀に動揺を見せる。優しい、ということもあるだろうが、惚けた所があるためピアドラが不死身だということを咄嗟に失念することが多いようだ。簡単に言えば天然。

安否を訊いてきた、自分と（外見の上では）同年代の仲間へ、ピ

アドラはうすぺらい笑顔を貼り付け右のブイサインを緩慢に挙げた。

「大丈夫。刺激的」

「シゲキ？ 気持ちイイか」

「うん。リアンが想像するのは確実に違うがな。アタシにや痛覚を含めて快感じゃがよ。わかるように諭たとえりやテーブルの角に小指をしたたかに打ちつけた苦悶くもんの後にゆくゆくは広がる、がんばったオレがんばった的な達成感のような」

「オウイエ、良薬クジで引いたし」

「リアン！ またすぐ来るぞ！」

危機感という言葉を馬鹿にしたような女子たちの会話にウィルフレッドが割り込んできて、視線を向けると槍魚は遠くでルーチンワークのように旋回しているところであった。

実在のモンスターであるが、その行動パターンはあまり現実的と言えない。ランカはもともと、攻撃性能は高くても攻撃本能自体は低いとされている種族で、獲物を集中的に狙うあの、執着心すら感じさせる旋回行動は、学者が見れば首をかしげるだろう。

本来ならば人間とすれ違おうとも、気にせず彼方へかっとなで行く飛ぶ魚である。

しかし、ここが現実空間ではないと考えれば、全ては許された。

あらゆる怪異は許容範囲に収まる。異常こそが正常。闘争本能を剥き出しにした魚など驚異の端にも引つかからなくなる。

硝子の果てを眺めてピアドラは、楽しそうに歪に鮮やかに笑んだ。

「もうあの魚は終わりじゃろ。放つときやくたばる。魚肉の出来上がりじゃ」

先ほど、ピアドラの身体を貫いたあたりで、通り過ぎる槍魚にウ

イルフレッドは薬弾を打ち込んでいたのだ。ピアドラは身体を崩壊させながらも、しっかりと目撃していた。彼が使った弾丸は、おおよそ予想できた。大きな魚、ランカの揚力は《魔》と言われている。撃ち込まれたのは、生物の《魔》を磨耗させるものだろう。彼は「リーク」と呼んでいる。彼がよく使うものだし、常時装備を欠かさない特殊な魔弾。

死に至る毒というほどでもないが、そもそも魔物を強力たらしめる要素は多くして《魔》なのである。使い勝手の良さならば、彼の中でも抜群の部類だろう。

魔物の《魔》が減少し弱ってしまえば、あとは怪力であるリアン、彼女の出番。

もう少しスピードが落ちたなら、彼女は槍魚を容易く捉え、それでこの戦闘は終結する。确实。自明の理。覆らぬ力関係。

彼と彼女の手にかければ、並のモンスターなど恐れる相手ではないだろう。

第三者のピアドラは、眺めていることが好きだった。彼が好きとは言わないし、彼女が好きとも言わない。ただ、彼と彼女の二人を眺めていることが好きだった。

今回も、無事に終わる。

それもロクに知らんクセによお

「ひよわあ、また来ますぜっ。おっかねええ……！」

「大丈夫ヨ、アッシュヘア、離れちゃ駄目ネ。逆にデンジャラスなるヨ」

「ええ。ええ。しかし、おっかねええ！」

頼もしいリアンの傍で、肩を強張らせてビビっている白髪の青年。

リアンが安心させるように声を大きくしていた。

ピアドラは少し離れた位置に立って、そんな二人の様子を眺めて、悪戯を好む子どもように邪心めいた笑みでニヤついて目を細める。少しも役に立たない、それどころか足を引っ張る、滑稽な煙突掃除に目を通し、柔らかい肩を揺らして、くつくつと笑う。

くつくつ、にやにや、くつくつ。

にやにや、くつくつ、にやにや 笑ったあと。

舌打ちを漏らした。

いつの間にかボクは「熱」を手に入れました。

熱を得た代わりに「時間」を失ってしまいました。



時間の代わりに「痛み」を手に入れました。

痛みによってボクは感情を手に入れました。小さな感情です。最初は不安や恐怖から始まりました。不安や恐怖を知った僕は、やがて理不尽なことに対する怒りも覚えることができました。

次に現れたのは憎しみです。不安や恐怖に対する憎しみです。しかし、憎しみはすぐに死んでしまいました。

僕は憎しみのおかげで、初めてキモチがポジティブに向いはじめたからです。

反省したからです。すごく、反省したからです。

熱を手に入れる前は、ボクも不安や恐怖を人に与えていたのだと気付いたからです。ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！ 悪い子でした……！ すごくすごくボクは悪い子でした。迷惑をかけてしまった皆さんはボクをボコボコにしてください。そうすればボクはありがとうと喜ぶはずですが、決してマゾではないので安心して踏みなじって罵倒してください。ボクは悪い子です。

悪い子なので言い訳をさせてください。きつと寂しかったんです。「熱」が無くて、「時間」だけがいつぱいあって、きつとあの時のボクは寂しかったから、「感情」が無くて退屈だったから、時間が痛くて、暇つぶしの感覚で人々の人生を飲み干したのだと思います。さっそく言い訳しなければ良かったと後悔します。思い返すとにかく最低です。鬱です。鬱だから自殺しようと思った瞬間もあります。そんなことをしたところで塵芥ちりあかたの価値も生まれません。残り少なくなってしまう時間を生きることになりました。

ボクは「不安」を噛み締めました。

生きていると、殴られるし、蹴られるし、バカだのゴミだの言われて、死にたくなるほど痛くなります。世の中ってヒドイもんです。ボクは見た目が汚かったから、いろんな人に暴力を受けました。ボクが迷惑かけた人たちではなく、関係のない人たちが何かと理由を挙げてボクを殴りました。かつてのボクも理由もなく人々を食べてしまったので因果応報だと思います。

反省をしました。省みました。後悔し改善に努めました。

不安を知って、ボクは喜びを知りました。  
それが最後に得た感情です。

優しい。

優しい。

こんなボクに優しさをくれる人たちもいました。

熱を手に入れる前は誰一人に対して優しくすることができなかつたボクに、こんな汚いボクに、優しくしてくれた人たちがいました。決して多くはありません。でも、います。優しい人たちは確実にいます。

ボクは。

ボクわ。

アタシわ。

アタシは、熱を手に入れました。

その魔神は、今はアツシユヘアと名乗っている。

正確に言えば元魔神だ。

長い眠りから覚めた魔神は、自分が魔神であった時の記憶を意識することはできず、ある瞬間から生まれた人間と何も変わりはない。彼にどのような両親が居たのかは不明。捨て子として生まれただけ、大昔に彼を葬って、人に転生させた魔王（アズラエルのことでない）の、性根の悪さを伺える。

生まれ変わってから、彼は苦労することになった。

捨て子であった彼はいくつかの家に拾われたが、紆余曲折を経て、最終的に辿り着いたのは、とある名家であった。しかし、そこはまるで人格破綻者の集まりで、養子にするつもりなどない捨て子に与えたものは、灰被りという名前に、玩具と奴隷の中間の役割であったのだ。

与えたものならばまだある。

痛みと屈辱。

家人はどれも、暴力的、病的、自己中心的、猟奇的、倒錯的。まともではない人格の根城であった屋敷には、まともな神経で働きに来る従者は少なく、小間使いとして拾われただけの白髪の少年に、仕事以外の時間に持ちかけられるのはもっぱら歪んだ享楽だけであ

る。まず、たまたま催眠効果に興味を持った病的な長男が熱した火  
かき棒と、ただの棒を使って暗示により肉体に変化が出るのか若い  
少年の生白い背中で試した。スタート地点がそこだ。以降は死なな  
い範囲でエスカレートしていく。

玩具として拾われたのだから、逃げることも許されない。玩具は  
主人に逆らってはいけない。逆らえば、死よりも苦しい罰が待ち受  
けていると、これは猟奇的だった長女の手で丹念に教え込まれた。

そんな少年期。

アッシュヘアが本当の意味で生誕したのは、その名家の主人が  
使用人の一人に殺され、瞬く間に没落したため彼が再び解放されて  
からだろう。

幸せとはいかなかったが。

楽しみならば見つけた。

一人で生きていくようになり、いろいろ安い仕事をしていくうち  
に煙突掃除をしていて、自分は家の屋根から街の通りを眺めること  
が好きだということに、アッシュヘアは気付いた。

もしかしたら、人が怖くなってしまったのかもしれない。

もしかしたら、魔神だった時の記憶が、よく見えるところから一  
人一人に謝りたかったのかもしれない。

何も覚えていない白髪の若者は、ススでの黒ずみが目立つ頭をワ  
シワシと搔いて、街の通りを眺めることが多くなっていった。

ある日、ある屋根、ある天気。

屋根の上で、アッシュヘアは誰かに声をかけられた。

優しい声だった。

「いやあ、へえ、はあ。アタシにやとんと思っても及ばぬくれえ、皆さん、お強いこつてすなあ。人が憧れる冒険者ってえのは、きつと皆さんのような冒険者を言うんでしようねえ」

「調子の好いこと言いよつての。口しか満足に動かせんガラクタが」

「お前が言うなよピアドラ」

「敵対テキトーね！ 口が達者なのトテモいいことヨ」

「後半なきや俺でもわからなかったぞ。適材適所か。レベル高けえな」

魔弾により失速した槍魚をリアンが問題なく撃破した後の会話。

妹分に言葉を返したあとに、しかし字面を見れば言い間違えでも意味合いは良いとウィルフレッドはぼんやり思った。リアンの発言にはそういうものが多い。

ピアドラは、アッシュヘアーに対して明らかに棘があつた。目つきも言葉も厳しい。珍しいことだ。ウィルフレッドから見るピアドラは、物事に対して好き嫌いを示すよりも、興味の有無を表に出すタイプである。内心で嫌っていたとしたら、興味を示さずに無視をするような寝袋だと思っていたのだが。

今は違う。アッシュヘアーに対して、明らかに嫌悪のようなものを感じる。時折、不機嫌そうな日もあるが、しかし態度として、はつきり見て取れるのは珍しい。

気になったので、ウィルフレッドが聞くと、寝袋の少女はいとも容易く、ニコニコとした笑顔で頷いてみせた。

「うん、嫌いじゃよ。生理的に。喰うのも躊躇うほどな。ストレスで胃潰瘍なりそうじゃ」

胃があるのか疑わしい少女の肯定に、人の好い表情のアッシュヘアーは苦笑いをしてガサガサの頭髪を撫でていた。

「あやあ、残念です。まあ、嫌われるのは慣れっこですが」

「ふん」

ピアドラの蔑む顔が、青年を鼻で笑うと、これまた珍しくピアドラは率先して歩き始めた。

「おい、どこ行くんだ」

自分の足で歩く寝袋が振り返る。

「どこだろうが一緒じゃろうて。次に何が出るか、興が湧いた。レツド、我が世の魔物が出たんじゃよ。意味がわかるか？ 今までは絵本の顔した竜だの、スライムだの、虚構的じゃった世界に、現実が混ざりよったよ」

ウィルフレッドは黙って耳を傾けた。

「わかりよるか？ つまり、この空間の主は《そういつ奴》じゃ」

「わかんねえよ」

「アタシもわからん。なんもならん話じゃ」

外見通りの年齢では絶対にできないような、超然とした微笑を傾けると、ピアドラはゆったりと前方に向き直り、再び硝子の彼方へと歩き始めた。

ウィルフレッドは、思い出したことがあったので口を開く。巨体が横たわり、動かなくなっているすぐ傍の地面へ視線を流しつつ、

「このランカ、夢の中だけど、結局食べられるのかね」

ピアドラがこちらへ戻ってくる。

機嫌良さそうに尻尾を振っていた。

・ G o t o N e x t

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3458f/>

---

Re:BirthWorld      カウンターフェイトを暴く者

2010年10月25日00時24分発行